

昭和41年4月12日・第1巻第1号 発行
昭和55年3月15日・第13巻 発行

—— (財)日本学校体育研究連合会機関誌 ——

学校体育研究

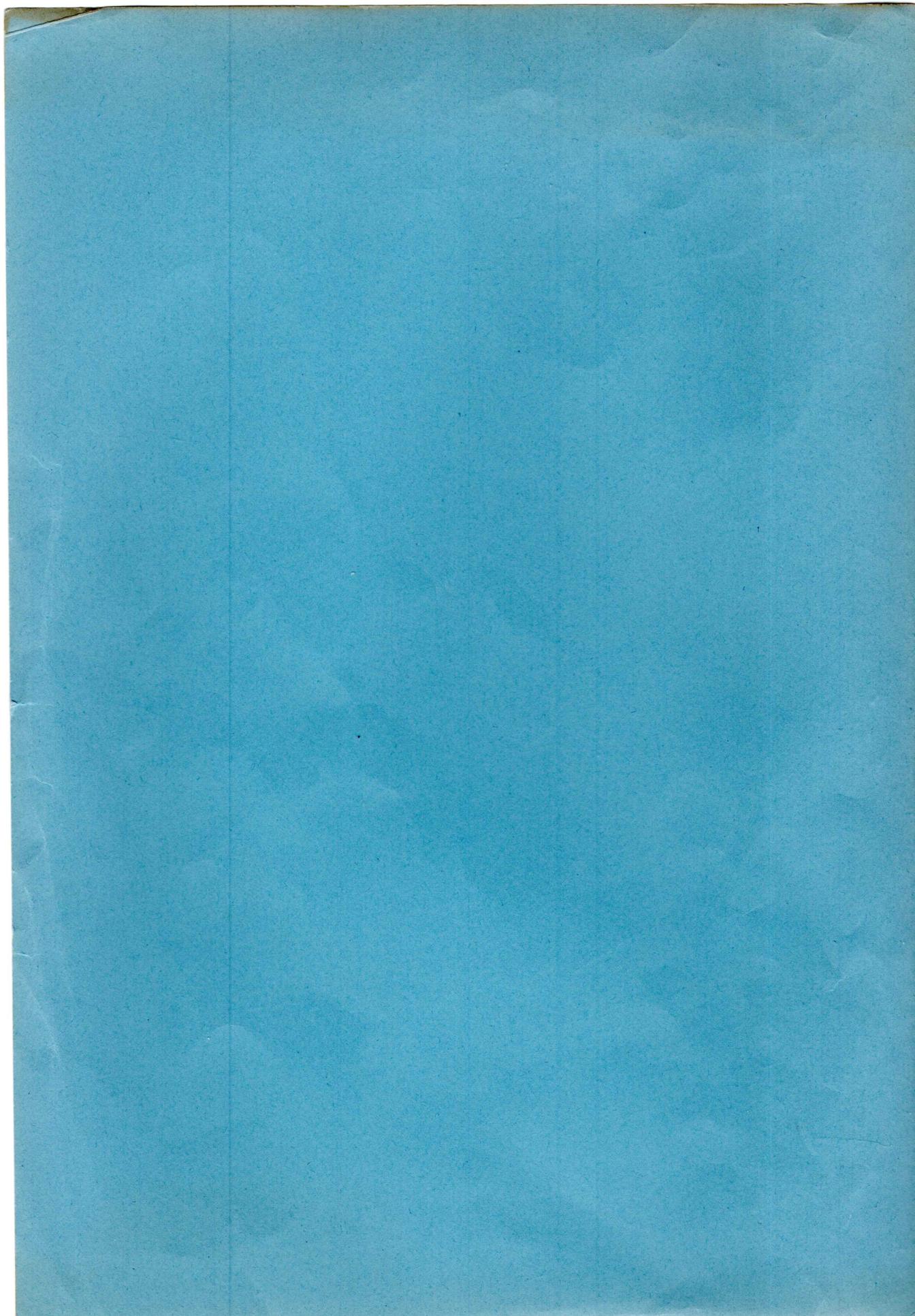
第13巻

昭和55年3月

目 次

- 巻 頭 言 会長・大石三四郎 1
- * * * * *
- **体育教師論**
体育教師として考えていること 岩手大学教授・高橋 哲雄 2
- **実践研究の紹介**
めあてをもって、よりよい働きと技能
を高める指導の工夫 東京都港区立桜川小学校長・福田 昇 7
- 規律ある生活習慣の形成とたくましい
体力づくりをめざす教育の実践 山梨県都留市立東桂中学校・日野原和仁 29
- 体力を高めるための指導
—教科体育外の体育(スポーツ活動)を通して 栃木県立真岡高等学校・久田 勝康 48
- 九州地区学校体育研究連絡協議会の組
織及び運営について 福岡県保健体育研究会・井上 博満 64
- 編 集 後 記 編 集 委 員 会 70

財団法人 日本学校体育研究連合会



巻頭言

会長 大石 三四郎

私が小学校から東京高等師範学校までの学校という名のつくところまで体育の時間で何を感じたのであろうか。

大正11年4月に横浜市立戸部小学校に入学した当時のことは、校庭がアスファルトで覆われていて、何か手足を形のごとく動かした感じのことしか覚えていない。大正12年に関東大震災があり、その後焼跡に出来たバラック建の校舎の前にあるグラウンドで跳箱などをやり、三橋喜久雄先生なる大指導者が来学するので、その日のために一生懸命練習させられたことが頭に浮ぶ。いわゆる三橋体操なるものであったのであろう。子供ながら戸部小学校の体操は日本最高のものであると信じたことを思い出す。

家に帰るとその当時の映画「活動写真」に出てくる「目玉の松ちゃん」こと尾上松之助の剣劇ごっこか、後になっては外国映画のターザンの真似ごとを家の中や近所のハラッパでやることに熱中したのを覚えている。その外、ケンカ蜘蛛を採りに行ったり、ケンカ蜘蛛に喧嘩させたりして遊んでいた。その子供の生活と学校の体操とは全く別のものであったようだ。

中学に入ると鉄棒に熱中して、尻上りやら、大振りなどに夢中になって昼休みによく練習した。体操の時間で面白かったのは、球技のサッカーやバレー、バスケットボールであった。朝早く学校に出かけ、授業の始まるまでバスケットボールをやったことを思い出す。中学の体操教師に鉄棒や棒高跳の上手を入がいた。その先生の演ずる技能を驚異の目をみはってみたものである。

その後東京高師に入学して、サッカー選手の生活を送ることになる。これは中学時代あまりやりもしなかった種目の選手になったものだから苦しいことばかりが思い出の種になっている。しかし短期間で目をみはる上達をしたことは事実である。私の入った体育科甲組は体操の先生になる専門コースだからその授業は大変であった。陸上、体操すべてが私にとっては苦しいことだらけであった。しかし薬になったことは事実である。

東京高師を終り軍隊生活に入る。そして千葉師範や金沢高等師範学校、東京教育大学の体育の先生になる。何もできない私は、多種目のスポーツ教材を教えることになるのだが、よくまあ動まったものだと思っている。そのうち、中学・高師時代(昭和4年~12年)に流行ったローラースケートを取り入れたり、ポーリングを授業に取り入れれたりすることになる。何か学校というところで取り上げる教材より、入間的にせまるものを感じたからである。意識したわけではないが、グラウンドなどの運動施設の不足を補うことになった。したがって、あまり難しい研究授業などは苦手でも閉口し逃げ出したいくらいだった。

ただ、この年になって考えることは、何でも何かを教えようとするとき、最もよい方法とはその内容をできるだけ詳しく、簡潔に、迅速に子供に叩きこむことだと思っている。

情報の集中化が第一と考える。そして子供の目が輝くような、好きそうな御馳走を食べさせることだと思っている。

一番大切なことは教えすぎないこと。自分で考えていくように仕向けることだと信ずる。

体育教師として考えていること

岩手大学教授 高橋 哲 雄

1845年8月15日、つまり第二次世界大戦を敗戦で迎えた日までのわが国の体育は、全く国家中心であった。

その日を境にして、体育にそれまで存在しなかったような新しい方向が示されたのである。なかでも大学にも必修科目として体育が課せられ、さらに、制度として体育学部や体育科が認められ、位置づけられたことなどは想像もつかないことであった。

しかし、現在においては、体育専攻の修士、博士課程まで設置され、体育に関する学問的研究水準が向上し、体育・スポーツの重用性も社会的に認められるようになった。特に、1960年以後の高度経済成長時代に入ってから、公害問題と同ようぐらいまでに身体運動不足の問題が重要視されるようになり、生涯体育的発想で検討されて来ているのが実状である。

そこで、以下25年間の体育教師体験を中心にしながら、常日頃考えていることの一端を述べてみたい。

◇現場の体育教師時代に実践し、考えたこと◇

思えば、新制大学発足第1回目の体育専攻として現場へ出、貧弱な体育施設・用具をもとに浅学の自己に鞭打っての体育指導が忘れられない。当時は、運動技術の指導が中心であり、その方法も発育・発達段階に照し合わせてはかなり無理なことが多かった。45～50名の生徒を対象にバスケットボール2個を用いての技術指導など、外国人がわが国の体育授業を参観して発した「ワンダフル」そのものの指導であったし、生涯体育の基礎・基本づくりなど夢物語だった。

やがてグループ学習論が提唱され、一方、アジア大会が東京で開催され、次いで国民待望の東京オリンピックの開催が決定するなどの国際的体育・スポーツ大会の刺激をえて、運動技術向上のためのトレーニングが学校体育界に導入されるようになり、1940年代前半までの国防体育論までは展開されないまでも、民主主義体育論は、技術向上を中心に、トレーニング論が強調され、実践されたのである。

しかし東京オリンピック(1964)を境にして、運動文化としての運動技術論も、そのとらえ方・考え方がかなり柔軟的となり、学習指導の現代化、構造化、効率化の諸論に合わせ体育教師論も、対象である運動者の立場から論じられるように発展し、教授・学習論の実践化と実証化が研究会で論議され、健康・体力を総体としてとらえられる気運が高まり、小中学校の現場体育者が未来志向の立場から体力論を考えるようになったのである。

私が中学教師として「効率的学習指導の構造」(1967)執筆のために研究・教育に精進し、努力していた頃は、運動技術の分析、体力トレーニング理論の授業での実践化、発達心理学的観点からの子供たちの実態からの構造的組み立てには随分と苦勞したものである。

例えば、ハードル教材の効率的学習指導の構造として、次のようなとらえ方、考え方を持つまで

そして文章化するまで半年ぐらいの時間を必要としたように記憶している。

教材……ハードル

中心的課題……与えられた台数をリズムカルにまたぎ越し、記録を向上すること。

構成要素……スタート・スタートダッシュ・踏み切り・空中動作・着地・インターバル走・ラストスパート・フィニッシュ

効率的指導法

技術を構成している要素のなかで、欠くことの出来ない最も転移性の高い要素は、それらに関連した一連の流れ、特にリズムカルな動作である。従って、1台のハードルの動作指導から台数をふやしていくことは効率的でない。

手順……2～3台を中心に走るリズムを体得させ、さらに記録を短縮させるために1台のハードルを出来るだけ速くまたぎ越すことである。そのためには速くから踏み切って近くへ着地することである。しかし、体型によって動作を操作することが大切である（小柄のものは着地が近いとインターバル走で苦勞する）。

こうした教育観で高校体育も指導できたら、と反省したこともあった。高校体育はどうしても技術中心的であり、その評価も教育工学的であり他教科の場合同様に横の評価で資料提示をし、運動部の指導にかなり多くの時間をかけたものである。

◇今日、大学教官として考えていること◇

過去15年間の現場教師の生活を経、しかも、教員養成を主目的とした学部の特性と合わせ考えた場合、最低次のような視点から体育を考え、とらえて養成につとめている。

第一は、教育者として体育を考えることである。

第二次大戦後、逸早く教育者組織を結成し、その発展に結集宣言をしたのが体育教師結団だった。そして、他教科教師の羨望の的でもあった。ところが、体育・スポーツ行事が中心となり、教育実践としての発想が弱かった。そのために体育教師は、行事屋と称されて出張の多い教師として、教科教育の観点から警戒の目で見られ、学校教育内における地位の獲得は遅れをとったとも考えられる。こうした矛盾に抵抗して、体育教師改造運動が展開された経緯もある。この点は体育教師像を考えていくに当って極めて重要な観点である。

体育教師が、このような状態で、いつまでも行事や技術の世界に座を占め、教育の世界に座を移さないでは、対社会的にも、かつての体操教師のイメージを再燃させることになる。現在の体育教師は、本質的には教育者であり、行事家やスポーツ選手と同じようなことをしていても姿勢を異にすることが大切である。常に広い世界観、人生観を持って学習過程の反省と思考に心がけて教育・研究する教育者でなければならない。従って教育者一般に求められている教育技術や教養を身につけた情熱家でなければならない。

学校教育制度が施行されて100年余の歴史のなかで知育・徳育・体育論は、繰返し叫ばれて来ているが、明確な実践例はない。あるのは学校教育の総論段階で説かれるが、各論では弱かったのである。

今日では、そうしたアンチテーゼで考え論じている段階ではない。教育の基礎条件としての健康づくりの観点から体育教育が論じられる段階に来ていることは周知のところである。このことが生

涯教育の一環として生涯体育・スポーツが論じられていることでもある。真に健康で、実践力があり、社会性に富む体育教師でありたいものである。そのためには、教育の原理や法則を知った体育教師でなければならない。

今は亡き、アジヤの偉人である毛沢東は「身体は知識を乗せる車であり、道徳を宿す家である」といっている。

第二は、専門家、実践者として体育を考えることである。

今や身体運動は広く世界に開かれたのも、国際的なものという認識が深まり、あらゆる情報を通じて、世界中の新しい考え方や方法や経験が報じられるようになっており、わかるようになっている。文化、教育現象としての身体運動や、スポーツの総合科学的研究によって体育の理論と実践が高められるようになった。そしてこの理論は、他教科や他分野では及ばない総合的なものとして高く評価されるに至ったのである。

今後は、こうした理論を身につけた、運動者に尊敬される専門家、実践者としての体育教師でないと、迫り来る運動不足社会や自由時間社会に対応できる人間が形成されないし、できないものと思われる。その点に体育の独自性があり、存在理由がある。かつてのような技術者のな体育教師であっては、体育の専門家、実践者とはなりえない社会である。

しかし、体育を専攻している学生の実態は、たとえば、部活動を通しての技術練習やそのためのトレーニングで精一杯である。そこには身体鍛練と技術練習を通しての専門家と、競技を通しての実践者としての自覚しかない。従って、極端に矮小化された専門家、実践者にみえるのは私だけだろうか。教育学部に学ぶ体育専攻学生である限り、単なるスポーツマンだけではない筈である。そのための勉強方法は多様にある。このことへの自覚を大学在学中にもたないと、体育教師としては、既述のような経過をたどることになり、教育者としての専門家、実践者の地位獲得が遅れることになる。

だからといって身体の鍛練や技術練習を軽視してはいけない。体育教師であるためには運動文化の体験者であることが望ましい。体験者には行の宗教ともいえるものをもっているし、実践に当って信念が生じてくるからである。

体育教師の専門性と実践力を維持する動力になっているのは、若々しい精神であり、豊かな人間性を得るための絶えざる努力と精進である。老い行く体力と技術を補ってさらに専門家、実践者として成長していくためには、年齢に対応しての体育の原理や方法さらに背景となる思想に造詣を深めていくことである。

第3は、未来社会に対応できる体育を考えることである。

私が大学を卒業して体育教師生活をはじめた1950年代の前半に、誰が予測したか、未来を暗示したことばとして、宇宙時代、原子力時代、オートメーション時代、コンピューター時代、洗済時代、レジャー時代、プラスチック時代、情報時代そしてエレクトロニクス時代ということを目にしたものである。現実にもその時代で生活をして考えることは、なぜ運動不足社会、生涯体育社会など健康に直接的に関係している問題が、未来を暗示したことばとして発しられなかったのか、ということである。

未来社会を考えなければ体力づくりなどこれほどまで考究する必要はないものと思われる。また、体力づくりやレクレーションなど、心身の健康づくり手段としてその人口数が増加しているのは、未来社会を指向した考えからであり、情報産業社会に生きる生活の知恵とも言える保健体育的発想

である。

現実の情報社会の文明的展望に立って、段階説の対応関係から考えてみても、第一段階の農業社会（内胚葉）においては体力がなければ生活ができなかったことであろう。やがて、工業社会（中胚葉）へ、そして情報産業社会（外胚葉）へと進歩し、発展するにつれて体力以上に知力が必要になって来たことが言える。今日のわが国の社会はその典型と言っても過言ではない。

フーラスティは、未来の生活時間を計算して、次のように述べている。「2000年頃は、人生90年、1週の労働時間20時間（4時間×5日）、1年の労働週数40週、1生の労働年数35年として計算すると、労働時間が3万時間、生理時間36万時間そして余暇時間40万時間となる」と。

その時代に生き、活躍する人間を育成する教師を養成していることを考える時、その使命の重大さを痛感すると同時に、体育科教育学の研究発展を顧みざるをえない。そのためには健康・体力に恵まれた知力のあるそして他から尊敬される体育教師を1人でも多く養成することであり、そのことの自覚をいくらかでも早い時期にさせることであろう。このことが未来社会で活躍する若者と生き生きと交際できる体育教師であり、未来社会で最も素晴らしい職業となるであろう、と思う。

幸い、ポジティブヘルス（Positive health）の発想から新健康管理論を論じている構成員に先輩体育人が入って活躍している。こうした各界における進出を体育教師が協力して支えるべきである。それこそまさに万人羨望の世界であり、職業である。

◇結びにかえて◇

最近、「地方の時代」が強調され、そのことに伴って「地方のスポーツ」を話題にすることが多くなった。

わが国で、スポーツ界を考えようとすれば、日本体育協会をぬきにしてはできないことが多い。ところが、いまの体協には、競技スポーツとならんで大衆スポーツをいっしょに進める原則と実際の運営を打ち出すのは困難である。国民体育大会開催を機会に組織づくりをして発展してきたスポーツ少年団も、いつの間にか競技スポーツのファームにしようとする動きさえ伺える。そして一方では、自主スポーツクラブが多く地方に誕生し、その協議会説立さえ叫ばれるようになっている。その手助をし、国民スポーツ組織をつくる時代の到来と考えている。そのためには、各種スポーツのリーダーを養成するだけでなく、スポーツ活動をお世話できるスポーツやレクリエーションのワーカーの育成に目を向けるべきである。従来のスポーツ組織づくりで反省された技術指導をその点に向け、その改善を図るべきである。真の「スポーツの生活化」や「スポーツの大衆化」とは、スポーツ活動を通して体得した時間管理や健康管理の健全なリズムを日常生活に生かすことであろう。単なるスポーツ技能を生活の一環として行うことだけでは説得力が足りない。

「地方のスポーツ」とは、地域住民一人ひとりが豊かな健全な心身で暮らすために欠くことのできない身体運動である、と考えられる。そういう身体運動を創造できる知恵と体力を持った体育教師でなければならない。政治や行政などの立ち遅れだけを指摘して責任を転嫁しているだけでは、

来世紀の準備時期・年代としての1980年代を乗り切る人間は育たない。自分たちのスポーツは自分たちの力でつくり出す、という地域住民が数多く育たない限り、「地方のスポーツ」は育たないであろう。

蝕ばまれ行く子どもたちの健康体力を真に心配しているのは、その親であり教師である。しかも、主体的に自己の責任範囲とさえ考えているのは体育教師である……といたい。

「体育・スポーツの実践はすべての人にとって基本的権利である」と「体育・スポーツ国際憲章」で規定している。スポーツがすべての人にとって、基本的人権の一つであることは、もはや疑う余地のないところである。「地方の時代」にふさわしい「地方のスポーツ」をなんとかして体育教師の力で育て発展させたいものである。

根気強くたくましい桜川の子の育成

—— めあてをもって、よりよい動きと技能を高める指導の工夫 ——

東京都港区立桜川小学校 福田 昇

I. 研究の目的

1. 本校のプロフィール

- 国電新橋駅に近く、第一京浜国道と日比谷通りにはさまれた中小自営業者の多い、いわゆる下町の地域である。
- 学級数 12, 児童数 330, 教職員19
- ビルに囲まれ校庭も狭く、プールは鉄板でふたをされ、夏季以外は常時校庭として使用されている。
- 一周75mのトラックは、アスファルト舗装の上、プールの鉄板(現在は人工芝がはりつけてある。)の上、そして第3コーナーは旧式の体育館の床を走りぬけるという極めて体育的環境に恵まれていない。
- 本校は創立105年に当り、5年前に校舎は四階建ての近代建築に新築されたものの、上記体育館は10年前に内部改修したために取り残されたものである。

2. 本校児童の長、短所

極めて明かるく素直で人なつっこい反面、東京っ子の特長といわれる粘り強さと自主性にかけている。そのうえ何かむずかしさ、苦しさ面にすると、歯をくいしばってそれを乗り越えようとするたくましさや殆どみられない。また、日常生活の中でも、あまり体を動かすことを好まず、校庭や屋上で

多い衝突、階段の踏みはずし、転倒による事故などが意外に多いのが、ここ数年来の実態である。

いかえれば、体的にも、運動機能でも極めて未熟な児童の多いのが実態である。

3. 本校教育目標の具現化

前述の本校児童の実態からみて、昭和52年度末の反省で、教育目標の見なおしの必要が生じ

- みずから計画し、実行する子ども
- 礼儀正しく、情操豊かな子ども
- 健康な子ども

の中で、特に「健康な子ども」をより具体化し、「根気強く、心も体もじょうぶな子ども」のように改められた。

更に新教育課程の趣旨をふまえ、53、54年の2か年計画で、「体育」の窓口を通して「根気強くたくましい桜川の子の育成」に全職員で取り組むことになった。具体的には、柔軟性、器用性、筋力などを高めながら、機能的にすぐれた子どもの育成をねらい、基本的な運動、器械運動を通して、「よりよい動きや技能を高める指導の工夫」の実践研究に踏み切ったわけである。

Ⅱ、研究の姿勢

1. 第1年次の研究

今まで体育について特に研究を深めたことのない、更に女教師が男教師の2倍という本校として、研究をすすめるに当たって、次の点を研究の基本姿勢としておさえた。

- (1)、研究が本校児童の実態に立つものであり、その変容をもたらすものであること。

児童の実態を概観するとき、そこには全教師の共通する問題意識があった。即ち、本校をとりまく生活環境が児童の運動生活を阻害する条件に満ちていること、児童の形態的発達の現状に問題傾向がみられること、更に体育学習時における活動面からみて技能的に劣る児童が目立つこと等である。

- (2)、児童の運動生活全般を点検し、問題点を明らかにすること。

児童の能力や身体的発達の実態を、形態運動能力・体力・技能・運動に関する興味関心などの意識等の諸側面から調達し、総則体育を含めた年間計画の立案や指導法改善のための基礎資料とする。

- (3)、新学習指導要領の趣旨をふまえた指導法の工夫が、この課題解決の視点と一致すること。

今次改訂の趣旨には、生涯体育が志向されており、「運動の楽しさの体得」が強調されている。運動領域の構成や内容の指導事項の示し方の変化の意図を正しく理解し合い、児童の立場から体育学習を見直すことは、まさに本校児童の体育学習における問題解決策であるという共通認識である。

- (4) 授業研究を通して、「良い授業とは」の追究をすること。

児童にとっては、楽しい体育学習ができること。教師は指導内容に精通しポイントをおさえた指導ができるように努力すること。特に、一時間の授業の流えを児童の学習活動の成立という面から見直すことをねらいとする。

2. 第2年次の研究

児童の実態をおさえ、授業研究で得られた指導内容のおさえ方等の理解に立って、研究の歩をすすめ基本の運動（特に器具・用具を使った運動）と器械運動の指導法にしぼって考え合うことにした。

本年度の課題は「めあてを持ち、よりよい動きと技能を高める指導」を目指して、研究的に授業の実践に取組むことである。それは「運動の楽しさを体得させる授業はどうあるべきか」、「精選された内容で計画化した指導の方向をどこに求めるべきか」という今日的課題の究明でもある。

(1) 年間指導計画の作成

研究を進めるに当たり、指導のよりどころとなる年間指導計画の作成作業も並行して進めてきた。（第2次案の作成）

作成の視点は、領域別授業時数の比率、教材の組み合わせ、指導資料の工夫等に重点を置き、様式については、月単位にその内容と指導の要点をわかりやすく一枚におさめ、指導が困難と思われる教材については参考資料として図解を入れ指導の要領がよくわかるよう配慮した。

(2) 指導過程の見直し

前年度の授業研究は、前述のような指導上の基本事項を図りながら、1時間の授業の流れを中心として「良い授業とは」を追究してきた。児童ひとりひとりが自分の課題をもち、それに真剣に取り組む、教師は適切な助言ができ、更に補助用具、器械の活用が工夫されている。このように児童の主体性と教師の指導性が程よく調和した授業のイメージ化が実感を伴って認識されてきた。そこで本年度は、単元として(一つの教材の指導計画として)の授業の一連の指導過程の構造化に着目して、その指導過程を見直すことに重点をおくことにした。

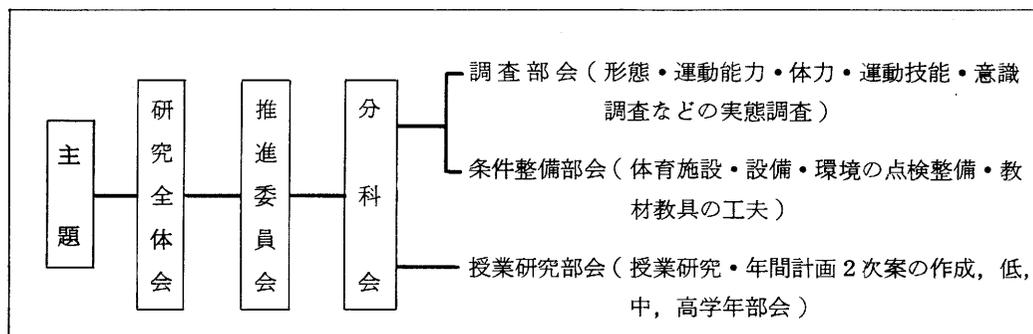
見直しの視点は、児童の技能の実態と学

年の目標との関連、学習の意欲化・主体化を図るための指導の工夫、楽しさを授業の中にどう具現するかに置いた。サブテーマに示したように、自己の能力に適した課題の達成を目指す学習活動の展開であり、学習活動の個別化に対する工夫がより必要とされる場所である。

Ⅲ 研究の組織と方法

1. 研究の組織

研究者が15名という小規模校のため、各自が2つの分科会に所属するようにし、3つの分科会を設けた。調査部会と条件整備部会のいずれかに所属し、授業研究部会は全員が低・中・高学年の3グループに分かれた。



2. 研究の方法

本年度は、昨年実施した実態調査による児童理解をさらに深めると共に、その実態をふまえた年間指導計画の作成、その計画に基づく授業研究の実践に重点をおいて研究的に取り組むことにした。また条件整備は、講堂の改築を控えているため、大きな施設・設備には手を加えないが、可能な範囲で児童の運動生活に有効な環境づくりを進める。

(1) 実態調査

児童の形態的な発達の現状、スポーツテストによる運動能力と体力の実態、踏み箱運動を中心とした技能面の実態、体育学習に関する興味・関心などを中心とした意識調査。調査対象は全校児童とし、集計と考察は調査部があたる。

(2) 授業研究

一学期中に12学級全員が授業研究を行ない、指導過程の分析、指導のあり方を検討し合う。特に、児童の一口感想を基に学習に対する意識の変容を捉え、主題の解明を目指す。また、学年目標と児童の能力の実態との関連をみる。

(3) 条件整備

体育に関する施設・設備の点検整備、教材教具の開発などを行ない、指導法の改善に役立てる。条件整備部会が発案し、作業は全員で行う。

Ⅳ 研究の内容

1. 児童の実態

実体調査の意義

本校では、児童の実体調査を研究主題の解明を目指す実践の中で、次のような視点からとらえている。第1は、今次の改訂の趣旨を正しく受け止めるならば、学校での体育活動全体を構想する上で、従来以上に児童の実態を重視する必要があること。第2は、日々の体育学習の指導に当たっても、児童の実態理解に立つ指導過程の構造化が図られなければ、これからの望ましい体育指導は期待できないであろうと考えられることである。

そのためには、前者については全校児童の形態的発達から学習に対する意識調査までの5つの側面からの実態把握を、後者については、それぞれの授業研究の中で学習課題との関連において実態をとらえることにした。

予想とその検証

実態調査は予想とその検証というパターンで実施した。児童の実態は平素の観察でかなり正確にとらえることができる。しかし、それは主観的な理解が中心であるから共通性が少ない。そこで、調査に当たっては、平素の指導で共通に感じている点(予想-仮設)が事実どの程度の状態にあるかを測定されたデーターによってより正確に検証されなくてはならないと考えた。

(1) 児童の形態的発達

本校児童の形態的発達の状況をみて、全体的に都市型のいわゆるもやしっ子の印象を持ったが、昨年度の調査でそれを裏づける結果が得られた。特に5・6年の伸び率が著しいことと、体重・胸囲ともに4年生が谷間になっている。いづれも増加率は高学年が高く、4年よりも3年の方が高い。昨年よりも体重がややさがり、胸囲が向上していることから全体的に好ましい発達傾向を示してきたといえる。この1年間の生活の中で形態的発達の状況がかなり変容してきていることがわかる。昨年7%だった肥満傾向児も本年は4.8%に減り、まだ他校のそれと比較して多いことは事実であるが、期待する方向に向っているといえる。

(2) スポーツテストの結果と考察

本校児童全体の傾向を代表している児童を上げ、それをプロフィールに表わしてみた。いづれも筋力が劣る傾向を示している。狭い校庭で全力を出しきる機会が少ないため、走力・跳力・投力などが劣ると予想していたが、特に問題点はみられなかった。

本校児童の形態一覧表

<表 1>

		身 長				体 重				胸 囲				座 高					
		桜川	54	区	都	桜川	53	54	区	都	桜川	53	54	区	都	桜川	54	区	都
1	男	1155	×	1166	1163	215	○	○	213	208	583	△	○	576	572	654	△	654	651
	女	1161	○	1166	1153	218	×	○	208	205	574	×	○	561	560	655	×	655	664
2	男	1225	○	1218	1212	234	○	△	236	230	608	△	○	597	593	682	○	679	674
	女	1192	×	1210	1203	216	○	×	229	224	569	△	×	579	576	663	○	672	669
3	男	1274	△	1275	1271	278	○	○	267	259	635	△	○	621	615	705	○	703	700
	女	1258	×	1270	1263	263	△	△	261	260	613	×	○	605	606	693	△	699	695
4	男	1320	△	1328	1319	293	○	△	296	290	647	△	○	643	641	721	△	726	721
	女	1308	×	1323	1317	286	○	△	291	285	626	△	△	629	627	722	△	725	720
5	男	1401	○	1380	1370	344	○	○	329	315	693	△	○	668	660	753	○	747	739
	女	1388	○	1387	1383	338	○	○	328	328	676	△	○	658	662	758	○	753	749
6	男	1461	○	1435	1433	388	○	○	367	362	724	△	○	691	695	785	○	769	768
	女	1467	○	1445	1462	389	△	△	370	388	731	×	○	691	710	788	△	781	790

※ 表中、桜川・昭和54年度、区・昭和53年度、都・昭和52年度体力調査報告書による。

※ 都平均との比較で、+は○、-は×、△はほぼ同位のものを示した。

※ 身長・座高は本年のみの比較、体重・胸囲は昨年と本年の比較

A 一年間の発育の様子

<表 2>

		1	2	3	4	5	6
体 重	男	-	+1.3	+3.0	+2.5	+3.7	+4.4
	女	-	+1.9	+2.8	+2.6	+3.8	+4.6
胸 囲	男	-	+3.5	+3.9	+3.6	+5.4	+6.2
	女	-	+3.1	+4.0	+4.2	+6.1	+7.4

体重・胸囲の増加率

<表 5>

		2	3	4	5	6
体 重		7.6	12.0	9.8	12.6	13.1
胸 囲		5.9	6.8	6.5	9.2	10.3

※ 単位は%

※ 表中の数字は、前年度からの伸びを示す

※ 体重はkg、胸囲はcm

E 児童の体型

<表 7>

	やせすぎ	やせている	ふ つ う	ふとっている	ふとりすぎ
ローレル指数	100以下	101~115	116~145	146~159	160以上
男	3	29	120	14	10
女	3	21	117	8	6
計	6	50	237	22	16

※昭和54年度 331名の本校の全児童を調査の対象とした。

① 低中学年スポーツテストの結果

<表 8>

種目 学年	走 (秒) 1, 2年 30m 3, 4年 50m			とびこしくぐり (秒)			連続ボールあて			
	本校54年度	53年度	全国	本校54年度	53年度	全国	本校54年度	53年度	全国	
1	男	6.94 △	7.01 ×	6.9	14.48○	13.99◎	14.8	8 ××	9.78△	9.7
	女	7.42××	6.63 ◎	7.2	16.06×	13.57◎	15.9	8.54 ×	9.05○	8.9
2	男	6.41 ○	6.50 △	6.5	12.85○	13.26△	13.3	10.89×	12.26○	11.9
	女	6.53 ○	6.49 ○	6.7	13.60○	14.43×	14.3	10.35×	11.21○	10.6
3	男	9.85 △	9.52 ○	9.8	12.67×	13.28×	12.3	13.23×	14.16○	13.6
	女	10.20○	9.89 ○	10.1	12.36○	13.22×	13.1	12.52○	12.14×	12.3
4	男	9.34 ○	9.90××	9.4	10.60◎	10.82○	11.5	16.27◎	15.1 ×	15.3
	女	10.03×	9.30 ○	9.7	11.47○	12.41×	12.0	15.29◎	13.23×	13.8

※ 小学校低・中学年スポーツテスト 本校53年度, 54年度実施

※ 全国値は, 文部省の昭和52年度調査による。

※ ◎ とくによい, ○ よい, △ ふつう, × 劣る ××とくに劣る

(3) 運動技能の調査

本校では, 主題との関連で「器械運動」と「水泳」にしぼって, 昨年度全学年にわたって技能調査を実施した。さか上がりだけでなく, 連続わざになると4年以上は極端にできない者の割合が高くなる。技能的な

むずかしさもあるが, 低・中学年からの積み重ねが大切であることを痛感する。

(マット運動, 跳び箱運動については紙面の都合で省略)

全体的に各学年とも前年度に比し, 平均で2段階の進歩がみられる。特に4年は進歩が目立ち, 前年度は4~5級の児童が中心をし

② 高学年スポーツテスト

A 体力診断テストの結果

<表 10>

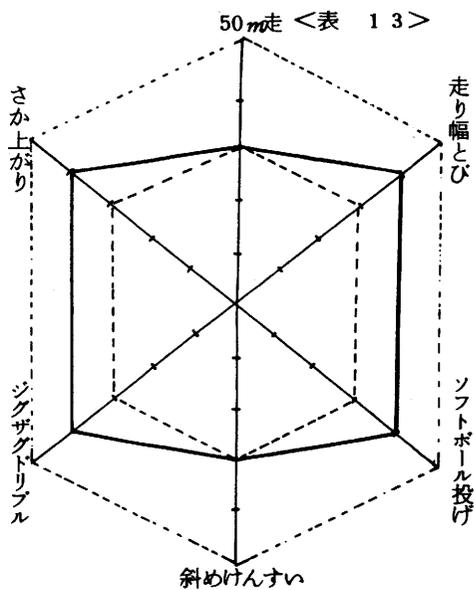
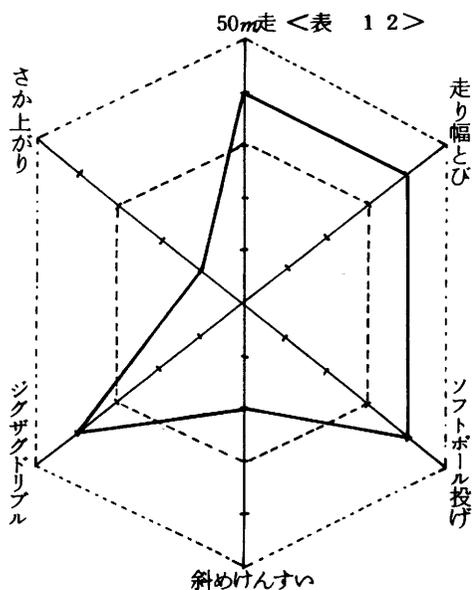
種目 学年		反復 横とび	垂直とび	背筋力	握力	伏臥 上体そらし	立位体 前屈	踏み台 昇降運動
5	54年度	男 41.0 ◎	36.1 ○	58.8 ○	21.2 ◎	46.6 ○	8.1 ○	62.3 ×
		女 39.0 ◎	32.4 △	51.1 ○	17.9 ○	48.8 ○	10.4 ○	49.7 ×
	53年度	男 40.3 ◎	30.7××	44.5××	17.0××	45.0 ○	7.0 △	63.6 ×
		女 39.5 ◎	29.6××	36.8××	14.6××	49.2 ◎	8.9 ×	61.8 ×
	都	男 36.5	33.3	56.1	17.7	43.3	6.7	65.4
		女 35.9	32.4	47.5	16.3	46.1	10.1	63.1
6	54年度	男 41.2 ◎	38 ○	61.4 △	22.3 ○	46.6 △	6.9 ○	57.1 ×
		女 39.8 ○	38.8 ◎	49 △	20.5 ×	50.3 ○	10.6 △	55.0 ×
	53年度	男 39.6 △	35.2 ×	66.1 △	18.1××	35.9××	6.8 △	74.3 ◎
		女 37.6 ×	32.1 ×	55.5 △	17.6××	39.2××	10.2 △	68.9 ◎
	都	男 39.3	36.8	65.3	21.0	46.0	6.8	65.1
		女 38.7	35.3	54.4	20.1	48.5	10.9	61.4

※ 高学年スポーツテスト 文部省体育局要員

※ 都の平均値は、昭和52年度都教委体力調査報告書による。

5年男子(A男)のプロフィール

6年女子(B子)のプロフィール



※ 表中の評価基準は、昭和52年度 体力調査報告書(都教委)の5段階表を利用

① 鉄棒運動 - さか上がり -

<表 14>

学年	性	A よ く で き る	B で き る	C で き な い	調 査 員
1	男	38	59		32
	女	14	52	34	21
2	男	24	18	58	33
	女	33	21	46	24
3	男	39	36	25	33
	女	40	48	12	25
4	男	72	14	14	21
	女	85		15	27
5	男	11	57	32	28
	女	33	46	21	24
6	男	42	39	19	31
	女	57		23	30

※ 評価基準は、昭和48年度東京都教育研究員報告書による。

めていたのが、2～3級にピークが移っている。

(4) 体育に関する意識調査

体育的環境の悪条件下での活動をよきなくされている本校児童が、どのような意識を持ち日々の体育学習に取り組んでいるかを明らかにすることも大切なことであると考え、下記の方法で意識調査を行なってみた。

<方法>

S, 54, 6, 8 記入式。1～6年の全児童332名を対象として3項目の質問とした。

㊦ 教科の中で体育が好きな順位

㊧ 体育の中で好きな運動領域の順位

㊨ 器械運動の中で好きな順位

集計は、㊦㊧については全校、㊨は学年別

<考察>

㊦では、体育を1番好き100人(男49女51)、2番目に好き84人(男54、女30)1番嫌い11人(男5、女6)

㊧では、1位水泳、2位ボール運動、ゲーム3位器械運動、4位陸上、㊨は上記グラフ

体育を好む児童が60%を越しており、これは「体を動かす喜び」が授業を通して得られてきたものといえる。また、水泳が最も好まれているのは、うまくなる即ち級があがるというように目あてがはっきりしていることによるといえる。そこで、器械運動などでも、明確な目あてをもって取り組めるような工夫をしていくことが、内面化への過程として大事であると考えられる。

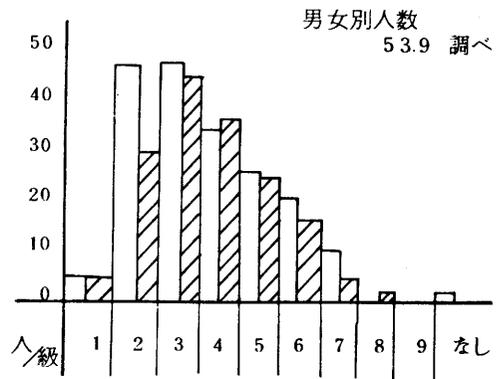
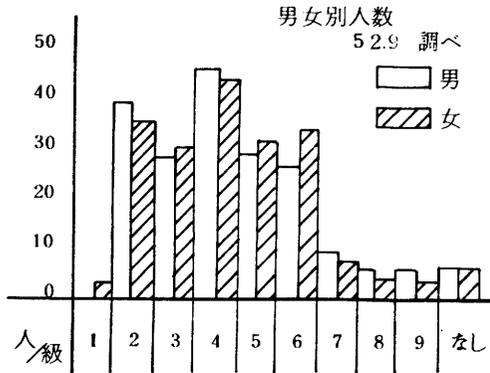
⑤ 水 泳

<表20>

		昭和53年度 級別人数												53.9 調べ	
学年 級	1		2		3		4		5		6		計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
1							1				2	3	3	3	6
2			4		4		9	6	15	13	14	10	46	29	75
3	3	1	11	4	14	9	4	16	5	3	10	11	47	44	91
4	7	4	6	7	7	12	4	3	6	7	4	3	34	36	70
5	7	5	4	9	5	5	4		3	2		1	23	22	45
6	9	8	7	4	3			1		1		1	19	15	34
7	6	3	2				1						9	3	12
8		1												1	1
9															0
なし													1		1
男女計	32	22	34	24	33	26	23	26	29	26	31	29	182	153	335
合計	54		58		59		49		55		60		335		

<表21>

<表22>



※ 1～6級は港区共通の級別段階表，7～9級は本校独自の級別段階

ウ・※数字は%

1年男	跳び箱 47	鉄棒 29	マット 24
女	27	53	20
2年男	39	35	26
女	60	15	25
3年男	77	20	3
女	52	38	10
4年男	80	7	13
女	69	22	9
5年男	40	32	28
女	52	26	22
6年男	74	19	7
女	跳び箱 64	12	マット 24

2. 授業研究 <指導過程の分析>

研究をすすめるための視点の第一は、年間計画の中に位置づけられた一つの教材（ここでは跳び箱運動）について、各学年段階に応じて学習の組み立てをすることである。そのためには、それぞれの教師が、「何を、どんな方法で、どこまで指導するのか」について、明確な構想を

もつことである。第二は、その構想が指導過程の中でどう修正されていくかを研究的にみていくことである。これは、学習の進展に伴う児童の変容を、教師の観察や学習後の児童の反省メモ、一口感想によって捉えようとするものである。

授業像（器械運動の授業を通し、新しい体育学習の方向を探求する）

- どの子もそれぞれ自分の課題をはっきりと持ち、それに真剣に挑戦している。教師は適切な助言ができ、適切な補助用具の工夫、器機の活用ができています。
- 自己の課題を根気強く克服していく過程で、運動のより深い楽しさを体得する。

< 学 習 の 過 程 >

- 自分なりに、いろいろやってみる。
- 上手な人の運動をみる。(絵図、フィルム)
イメージ化
- どうすればよいかかわかったら、実際にやってみる。
- 自分の問題点に気づき、課題をもつ。
- 課題解決をめざし挑戦する。(反復)
- 友だちにみてもらう。(励まし、評価)
- 先生にみてもらう。(励まし、評価)
- 自己評価(次への課題をもつ)

< 指 導 の 過 程 >

- 体育科の目標から教材のねらいまでよくとらえる。
- めあての用具のため、教材理解を深める。
- 児童の技能や意識を正しくとらえる。
- 教材、教具の工夫や適当な資料をもつ
(絵図、機器、学習カードなど)
- 適切なアドバイスができる。
(指導のポイントがわかる。)
- 計画、実践、評価のサイクルの中で、展望をもつ。

学習内容の精選やゆとりのある活動を志向するこれわらの指導において、学習活動はますますきめ細かい指導の裏づけが必要となる。従来の貴重な指導法の研究の成果を十分活用し、指導活動と学習活動のバランスを考慮した授業を実現したい。低学年では、夢中になって学習している結果が技能の向上や望ましい態度形成につながり、学習が進むに従って明確な課題把握とそれへの主体的な克服活動のみられる授業、このような授業をめざしたいと考える。

◎ 高学年の授業と指導過程

1. 高学年の教材の扱い方と指導

(1) 教材の扱い方について

高学年の器械運動は「自己の能力に適した課題をもって鉄棒運動、マット運動及び跳び箱運動を行い、その技能を養うとともに、器機の使い方を工夫し、互いに協力し、安全にしかも根気強く運動できるようにする。」ことをねらいとしている。

そして跳び箱運動では、「跳び箱を使って、大きな動作で腕立て跳び越しができる。」ことを目指している。指導書では、更に「大きな動作」について、「踏み切りから跳び箱に手をつくまでと、手の突き離しから着地までの両方が全体として、大きな動作になること」と説明を加えている。

前回の指導書でも「自分の技能の程度に応じた目標を決め……基礎的技術を養う。」という表現で述べられており「ねらい」のおさえ方は変わっていない。しかし、実際の指導においては、とび箱の高さを問題にしたり、踏み切り板を速くしたりすることが技能の高まりと考えられやすかった。それは、指導内容の頃に「とび箱の高さ、助走距離、踏み切り位置などの条件を変えて行わせる。」と示されている点を短絡的に受けとめた結果であろう。跳べるものにとっては「もっと高いとび箱を跳びたい」という欲求を持つのは自然である。しかし、跳べるからといって、どんどん高さを上げたり、踏み切りの位置を離したりしていくというやり方で果たして学習本来のねらいが果たせるかは疑問である。

そこで、われわれは、とび箱運動のねらいを「安全に、よりよいフォームで調子よくできる」ことにあるととらえ、助走・踏み切り・手のつき放し・台上でのフォーム・着地という一連の動きが、調子よくできることをめざした。高さや踏み切り位置はその条件を確実に満たすためにあるものであり、それが調子よくできたあとに求められる条件であると考えたのである。

(2) 高学年の指導について

〈課題のもち方・もたせ方〉 とび箱運動は、一つの技を問題とする運動である。従って、課題は一つになる。とにかく跳べるようにすることが指導の重点になってこなくてはならない。

そこで、学習の導入段階では、まず、いままでの経験をもとにして、各自いまできる跳び越し方を実際に行き確かめることから出発することになる。指導書にあげてある「～児童の個々の技能

の程度に応じて、それにふさわしい課題を設定すること～」の個々の技能の程度を、教師とともに児童自身にもよく確かめさせる必要がある。そして、跳び越しの基本的な要領を変えないで、違った条件（とび箱の高さ・方向・フォーム）に対し、自分の力にあった跳び越し方を選ばせ、そのめあてに向って各自が努めていく。「できない」わざを「できる」ように、また、「できる」わざを「より上手にできる」ようにすることが、一人一人の課題になり、努力するめあてになるのである。

〈課題の解決のし方・させ方〉次に、その課題の解決であるが、それには、一つのわざの段階的指導法を教師が理解しておくことが有効であると考える。この場合の段階指導法とは、助走から着地までの分節的に区切った指導という意味ではなく、「地床でのかえるとびやうさぎとび」、「ふたり組での馬とび」などのとび箱にはいる前の段階から、「とび箱一段を使ってのかえるとび」「とび箱の手前にもう一台低いとび箱を置いての跳び越し」など、とべない子の練習方法を段階的に工夫することであると考えている。児童の一人一人が自分の力を知り練習カードによって、やさしい課題から一段一段と確実に身につけさせていくことである。しかも、それが児童の自主的な取り組みによってなされることが必要である。

〈児童の自発的学習の促進〉児童が自発的に学習できるようにするためには、学習指導の個別化を図ることや、小集団指導を工夫することが必要である。指導書には、個別化のために技能の段階表の作成があげられている。本校ではそれを練習カードとして作成し活用している。また、ねらいの「～互いに協力し、根気強く運動できるよう

にする」を、小集団指導に求めて実践している。跳び箱運動は個人的スポーツであるが、グループで協力し合って学習することにより、より効果が高まることが期待できるからである。

前年の授業の基礎研究の中で、体育の学習はまさに、学級経営そのものであるという実感がわれわれの共通した意識としてとらえられた。小集団指導は、他人のやり方を見て自分のやり方の問題点にも気づく、互に教え合い、注意し合うことによって技能が高まるものである。互いの賞賛や認め合いが喜びや満足感、さらに、次時への意欲となることなど多くの利点をもっている。そのため、他人の試技の見方、協力的な学習のし方、互に認め合い、友だちの成功を喜ぶ、できない者を励ますなど、ふだんの学級経営の中でその雰囲気づくりをしていくことが必要である。そして、これらの努力を継続していくことが、「互に協力し」の具体的内容であるとしてとらえているのである。これがさらに、運動の楽しさや根気強さに発展するものであると考えている。

高学年になると、跳び箱運動の学習の場合は特に技能差が大きくなっていく。児童の中には「体育の中に跳び箱なんてなぜあるのだろう」という慨嘆の声すらもらす子がいる。しかし、学習の過程を追うに従って「先生、あしたの体育の時間も跳び箱やらせてね」というように意識が変容していく。われわれはそこに運動の特性に触れる楽しさの体得を見るのである。

2. 児童の実態

本校の児童を運動生活の面から概観すると、運動内容ばかりでなく興味・関心の度合いも格差が目立つ。これは、児童の生活圏が自然に運動した

り遊んだりするためには、極端に悪い条件の中にあるためである。自ら運動を求めようとする者は、学校での遊びや運動以外は地域のスポーツクラブに所属するが、電車やバスを利用して他のスポーツ教室や広い遊び場を進んで探さねばならない。そのため、大部分の児童は近隣の狭い遊び場や路地での限られた遊びを強いられているのが実態である。家庭での積極的な応援を得て、地域のスポーツクラブに通っている児童もいるが、学年が進むにつれて学習塾に変わる者が多くなり、運動とは縁遠い生活を余儀なくされるようである。学校における教科体育の重要性とともに、家庭での運動に対する理解の必要性を痛感するところである。

〈体育学習に対する意欲と技能の実態〉 運動領域の中で最も好まれているのはボール運動である。本校ではバスケットゴールが狭い講堂に設置されているため、ポートボールを教材として扱っているが、児童はこれに大変興味を持っている。児童の意識は、体育のもつ解放性と身体活動それ自身に対する興味を中心を占めており、技能の習得や継続した練習課題に対する挑戦の意欲は不十分である。

技能面の実態調査の結果、鉄棒運動は全体的に劣るが、マット・跳び箱運動は都の調査結果（昭48年度研究員調査参照）とほぼ同じ傾向を示している。体育の授業を通したわれわれの観察から言えることは、児童の技能差が大きい点である。

3. 学習過程の記録

(1) 学習の組み立てと計画

上述のような教材観・指導観と児童の実態の把握の上に、跳び箱運動の一連の指導を次のように

組み立てて授業研究を試みた。計画の基本には、運動の楽しさや学習のめあてと共に、あくまでも児童の意識の開発と技能の実態を正確にとらえることに置いた。

年間に計画された10時間の跳び箱運動の学習

の中で、一人一人が自己の力にあった課題をもち、その達成に向って目を輝かせて挑戦していく姿を期待している。教師が一連の指導過程に対して、この児童をここまで伸ばしたという明確なイメージを持つことが必要である。

(2) 体育科学習指導案

昭和54年7月3日(火) 第4校時 講堂
 第6学年1組 在籍28名(男子15名, 女子13名)
 指導者 矢沢公雄

1. 教材 体操・器械運動(腕立て閉脚跳び)

2. 教材のねらい

教材内容	体操(タイミングのよい動き)	腕立て閉脚跳び
技能力	<ul style="list-style-type: none"> ○タイミングのよい動きを高める運動のねらいや方法を知る。 ○継続してねばり強く運動し体力を高めめることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○助走して両足で踏み切り, 両手をつき, ひざをまげて胸に引きつけ, 大きな動作で調子よく遠くへ跳び越すことができるようにする。
態度	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の体力に適した目標を立て, ねばり強く運動する。 ○器具や場の安全を確かめ, きまりを守って練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の能力に適した課題をもって運動することができるようにする。 ○お互いに協力して, 根気強く運動することができるようにする。
集団行動	集合, 整とんが素早くできるようにする。	

3. 指導計画 (体操—2時間, 5回扱い, 腕立て閉脚跳び—3時間, 5回扱い)

指導段階	時	体操(タイミングのよい動き)	指導段階	時	腕立て閉脚跳び
第1次	20×1	<ul style="list-style-type: none"> ○組み合わせた運動の内容や方法を知り, 練習する。 1.歩・走, 2.体の回旋, ねん転, 3.手つなぎ跳び, 4.平均台での歩走, 5.うさぎ跳び 	第1次	25×1	<ul style="list-style-type: none"> ○運動の内容や方法を知り, 学習の見通しをもつ。グループ編成 ○腕立て閉脚跳びの練習をする。
第2次	20×2 15×1	<ul style="list-style-type: none"> ○特に, 4.5の運動を重点的に練習し, タイミングのよい動きができるようにする。 (本時2/3) 	第2次	25×2	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の能力に適した課題をもって, 繰り返し練習する。 (本時2/2)
第3次	15×1	<ul style="list-style-type: none"> ○速さ, 回数, 距離などを換え, 工夫してタイミングのよい動きができるようにする。 	第3次	30×2	<ul style="list-style-type: none"> ○安定した大きな動作で, 調子よく跳び越す。

4. 児童の実態

学習時おちつきのない児童が多く, 友だちの言動に左右されることが目立つ。体育は全体的に好んで取り組むが, 器械運動は不得手な子が多い。体育の指導上注意を要する児童2名(肥満体でぜん息気味の者, 極度に社会性のない者)

5. 本時の指導

(1) 本時のねらい

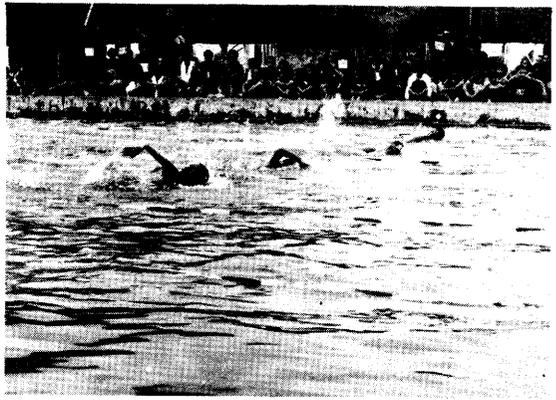
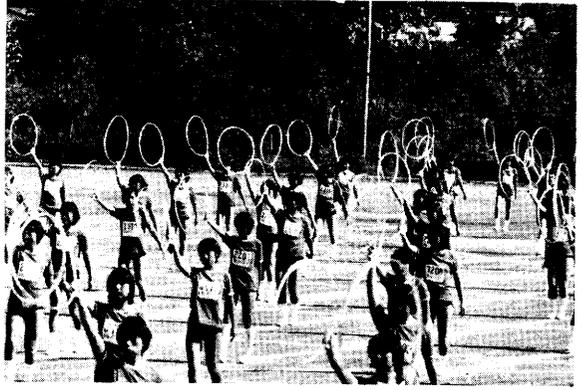
- 組み合わせた運動を行い、タイミングのよい動きができるようにする。
特に、4.5の運動に重点を置き繰り返し練習する。
- 自分のつまづきや課題を知り、それを達成するように、繰り返し練習する。

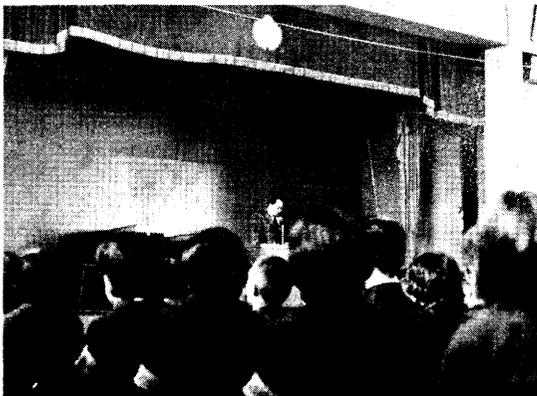
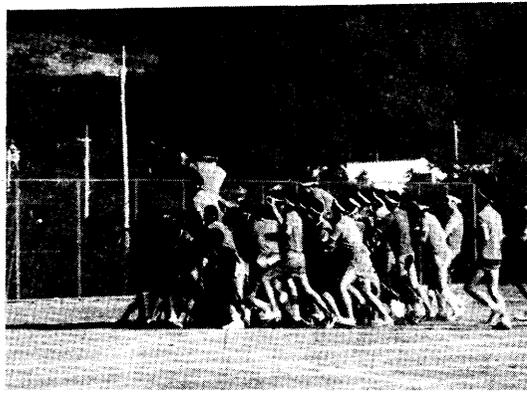
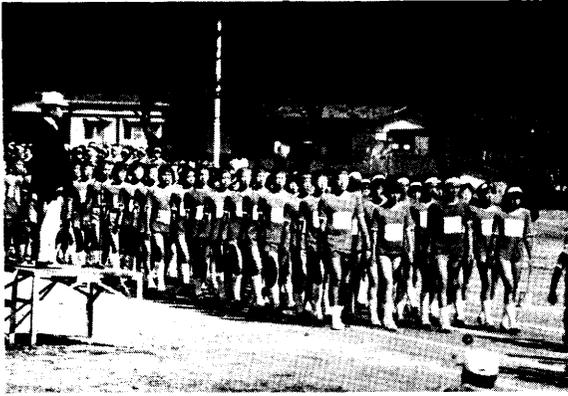
(2) 展 開

段階	時間	学 習 活 動	指導上の留意点	備 考
導 入	3	1.集合し、学習の順序や方法を知る。 2.本時のめあてを話し合う。	○健康観察をする。 ○めあてをはっきりさせる。	絵 図
展 開	17	3.組み合わせた運動をする。 ・グループごとの歩、走 ・体の回旋、ねん転 ・手つなぎとび ・平均台での歩・走 ・うさぎ跳び	○タンブリンなどの合図に合わせてさせる。 ○歩走を中心にいろいろな動きを工夫させる。	タンブリン
	23	4.腕立て閉脚跳びをする。 ・自分の課題を克服するよう繰り返し練習をする。 A班、遠くへ跳び越す B班、安定した姿勢で跳び越す C班、確実に跳び越す D班、跳び越す ・互いに教え合って練習する 5.友だちの跳び方を見る	○自分の課題をつかませる。 ○準備ができた班から練習に入らせる。 ○はじめから全力で挑ばないようにさせる。 ○個別指導に重点を置き、励ましの助言を与える。 ○互いに長所や欠点を指摘し合わせる。 ○学習の成果を確かめさせる。	能力別 練習カード 黒 板
整 理	2	6.あとしまつ、整理運動、次時の予告	○次時は、より大きな動作で遠くへ着地させる。	

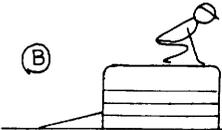
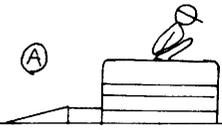
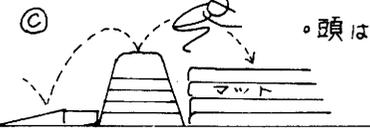
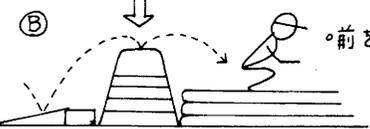
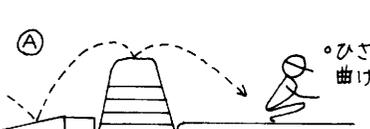
6. 評 価

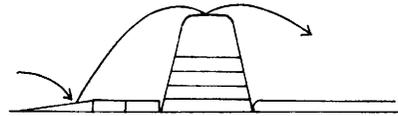
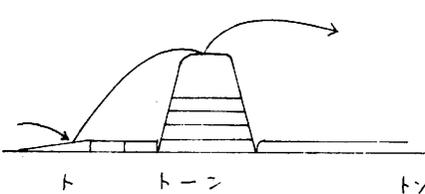
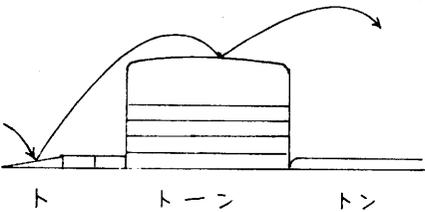
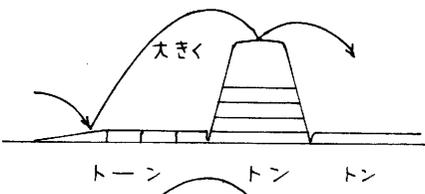
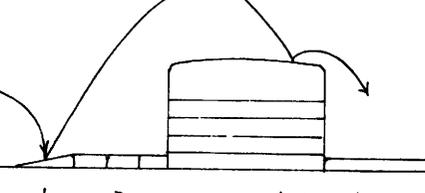
- 一連の運動が正確にできたか。(体操)
- 自分の課題をもって閉脚跳びができたか。(跳び箱)
 - ・腕のつき放なしを強くし、遠くまで跳んだり、踏み切り板を離して遠くから跳び越すことができたか。
 - ・体を浮かせ、ひざをよく引きつけて跳び越すことができたか。
- 互いに教え合いながら根気強く運動することができたか。
- 運動する場所や用具の安全を確かめて運動することができたか。





練習カード

運動の方法	練習のポイント(図解)	評	価
		月日	印
<p>〔閉脚とび〕</p> <p>(できない) (1)</p> <p>跳び箱を縦に置き 跳びあがる。</p> <p>(3年) (2)</p>	 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・足うらで しっかりつく  <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手より足を 前に出す ・手を強くふりおろす ・ひざを胸にひきつける 		
<p>(できる)</p> <p>跳び箱を横に置き 跳び越す。</p> <p>(3~4年)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin: 10px 0;">とべた!</div> <p>〈条件づけ〉</p> <p>助走から着地まで 調子よく跳ぶ。</p> <p>踏み切りの位置を はなして跳ぶ。</p> <p>(6)</p> <p>(7)</p>	 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・頭は前  <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前を見る  <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひざを 曲げる ・強くふみ切る ・2~3mの助走 ・うでを突きはなす ・やわらかく着地する  <p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助走を いかして とび ・助走から着地までリズムカルに跳ぶ ・手のつきを早くして 跳ぶ  <p>⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4~5mの助走 ・最後の一步を広くして 両足をそろえ、 斜め上の方に踏み切る 		

運動の方法	練習のポイント(図解)	評価	
		月日	印
(よくできる) 遠くから低く入り 調子よく跳ぶ (8)	 <ul style="list-style-type: none"> 遠くへ跳ぶときは 踏み切りは低く入り、手のつきも早く、後ろ下にかくようにする。 ひざは最後まで曲げている。 空間の姿勢よりも、跳び方のリズムをおぼえる。 		
リズミカルに (横) (9)			
大きな動作で 遠くへ跳ぶ (縦) (10)			
(横) (11)			
美しいフォームで 安全に着地する (縦) (12)	 <ul style="list-style-type: none"> 5~7m 助走、とぎれないように助走する。 		

(3) 児童の変容の記録

目標—児童の実態—課題

	技 能	態 度
目学 標年	○各種の運動の楽しさを体得するとともに、その特性に応じた技能を養い体力を高める。	○協力・公正などの態度を育てるとともに健康安全に留意し、自己の最善を尽して運動する態度を育てる。
の器 械 目 運 標 動	○自己の能力に適した課題をもって、鉄棒、マット、跳び箱の各運動を行い、その技能を養う。	○器機の使用の方法を工夫し、互いに協力し、安全にしかも根気強く運動できる態度を養う。
動跳 のび 目箱 標運	○跳び箱を使って大きな動作で、腕立て跳び越しができるようにする。	○自己の能力に適した課題を設定し、互いに役割を分担するなど協力して根気強く運動できる。
跳腕 び立 のて 目閉 標脚	○助走して両足で踏み切り、両手をつきひざを曲げて胸に引きつけ、大きな動作で調子よく速くへ跳ぶことができるようにする。	○自己の能力に適した課題をもって運動することができるようにする。 ○互いに協力して、根気強く運動することができるようにする。

指導過程（児童の意識—口感想より）

段 階	導 入	展 展	開	整 理
時	1	2	3	4
教 師	各時のねらい ○運動の内容や方法を知って学習の見通しをもつ ○腕立て閉脚跳びの練習をする	○踏み切りに低く入って踏み切り速くへ着地するように閉脚跳びをする	○跳び箱を強く突き放し、体を斜めに保つようにして閉脚跳びをする	○強く踏み切って速くへ着地するようにして閉脚跳びをする
	課 題 ○運動の方法をわからせる ○前学年までにやったことを確かめさせる	○各自に自分 合った課題を持たせる	○つまづきの原因をわからせる	○協力して練習させる ○意欲の持たせ方を工夫する
児 童	課題への挑戦 ○きょうのめあては横をらくに跳び越すこと ○ぼくの目標はなんとしても跳び越すこと	○美しく跳び青い線まで跳ぶのがめあてです ○全然進歩がない、でも自分の悪いところはだんだんわかってきた	(本時)	
	成 就 感 ○あまりおもしろくない ○閉脚跳びなんてもういやです ○心の中で「ぜったい跳んでみせる」と思った。	○この次は低くはいるということ ○友だちの中には、もうすぐ跳べる人もいます。わたしもがんばって跳びたい		

4. 高学年の指導のあり方

(1) 学習内容をどうおさえるか

高学年の跳び箱運動でみると、例示されているのは、5年で2教材、6年で3教材である。技能のねらいとしては「跳び箱を使って、大きな動作で腕立て跳び越しができる。」ことが目標である。態度では単にわざができるだけでなく、演技の開始から終了までが節度ある美しい行動でできるよう期待されている。

そして、今回の改訂では、特に「児童の個々の技能の程度に応じて、それにふさわしい課題を設定すること。」という表現で、各自の能力に応じた課題の設定が強調されている。従来も、「自分の技能の程度に応じた目標を決め……」がねらいの中に表現されているが、内容のおさえ方としてこの運動の特徴的なところである。これは、学年が進むに従って技能差が大きくなる実態に立った指導の考え方である。また器械運動が克服スポーツとしておさえられたことや、学習を児童サイドから見直すという新しい方向からも、当然のこととして受け止められる点である。

従って、指導に当たっては、一人一人の児童が今どんな状態にあるかを教師も児童自身も正確にとらえているようにしなければならない。

(2) 指導法で工夫すべきことは何か

ア 段階指導の必要性

児童の実態を正確にとらえ、めあてとしての技能、態度をより向上させるためには、どうしても個別指導が必要である。個別指導のポイントは、児童に課題をはっきり持たせることであり、そのための細かい学習段階の提示が必要である。本校では技能差が極度に大きい児童の実態に立って、

練習カードの内容も段階を数多く設けた。授業研究の中でも、6年生の学習のめあての達成が不可能な者に対する指導が問題になった。できるものへの条件づけはできるが、できない者は技能的要求をどこまでおろさなくてはならないかという点である。結論的には、その教材の特性を失わない範囲で運動を単純化して与えると考えた。

イ 学習形態の再検討

器械運動の学習形態はその大部分が小集団による。従って、グルーピングは学習の効果を左右する。小集団編成では、それぞれの長短を考慮し特質集団と異質集団を適宜活用するようになるが、児童の意識を十分考慮する必要がある。教え合いや励まし合いは学習効果を高めるが、普通の学級経営の中での耕やしに特に必要である。

ウ その他、補助用具や補助の工夫は欠くことのできない点である。

3. 条件整備

4. 全校運動（桜川タイム）への取り組みについては、紙面の関係で省略する。

以上本校2年間のささやかな研究の歩みを述べてきたが、率直なところ研究の緒についた段階で、喜々として休憩時に、体育時に活動している児童の変容の姿を楽しみに、また、次年度に新築される体育館（1階ピロティ、2・3階体育館、屋上プール）の活用とともに、今後の研究実践に期待をかけている。

《昭和52・53年度山梨県教育委員会指定体育実験学校》

規律ある生活習慣の形成と

たくましい体力づくりをめざす教育の実践

山梨県都留市立東桂中学校

学校長 小 俣 嘉 助
研究主任 日野原 和 仁

1 はじめに

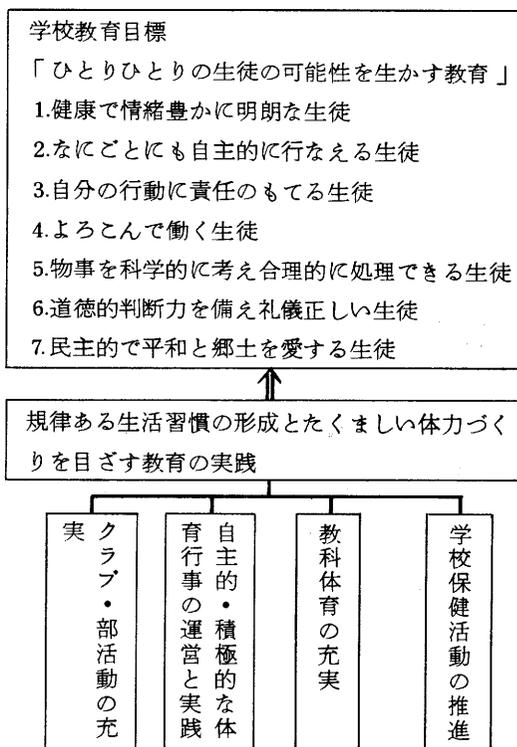
心身ともに調和のとれた健康な身体づくりは学校教育最大の目標であり、すべての教育活動の基盤である。身体的、精神的発達の著しい中学生にとって、たくましい身体づくりと強い精神力、豊かな心情の育成は必要欠くべからざることであり教育活動全体を通して指導実践が図られなくてはならない。

本校においても、体力、精神力など乏しい生徒が多く、一部生徒による体育活動（部活動など）は盛んであっても、多くは生活の中に運動が生かされず、何事もなくたゞその日を送っている者が見かけられる。そのため生活に活気や喜び、楽しさ等を見いだせず、集団としても節度のある生活態度に欠ける状態である。これらの改善や健康診断等で指摘された、背柱側ワシ、貧血症、う歯等に対する対策も図らねばならない。このような理由のため学校体育の充実を図り、積極的、自主的な保健体育活動を通して、規律ある生活習慣の形成とたくましい体力づくりをめざすと共に、保健

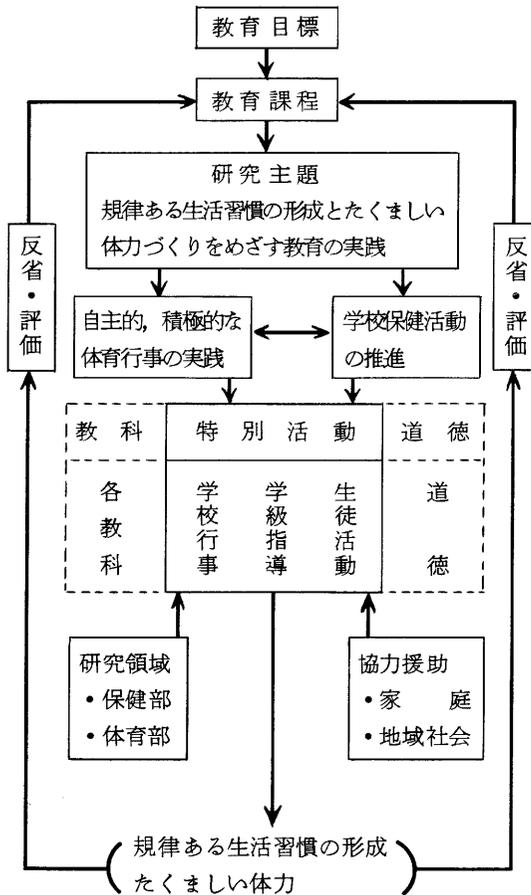
衛生に対する意識と実践力を培う教育を行う。

2 研究方法

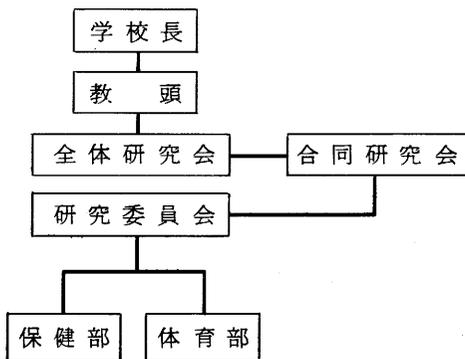
教育目標との関係



研究全体構想



研究組織



主題と教育目標との関連を考え、柱立てをしその中から、体育行事と保健活動に重点ををぼり、図のような研究の全体構想を考え推進した。

また、主題の概念については、「体力とは主に身体機能を意味しているが、形態は機能の土台として含まれ、体力は人間のあらゆる活動の基礎となる能力でいかなる環境のもとにも人間が生活力に満ちた生命を完了するための能力である。体力の内容と身体的能力と精神的能力に分け、この両者において行動体力と防衛体力に分ける考え方がある」という猪飼氏の説から図のような体力概念を共通理解した。規律については、「個人の生活を規則正しく行ない、団体の秩序を保つていくための行為の基準である」と言う考えより、学校生活が集団の場で行なわれている以上、集団として望ましい行動や態度が必要である。従って規律の指導にあたっては各活動の場で学習される規律が、その場だけの行動や態度で終ることなく、一人一人の自覚と意識に根ざしたものになるよう精神的向上を図らなくてはならない。一つ一つの場面ごとに精神的に裏づけられた行動を積み重ねていく事が、現在及び将来の生活において望ましい生活習慣として発展すると考え、具体的に次の事柄をあげた。

- 集団行動の主な行動様式を身につける。
- 集団の約束やきまりを守って行動する。
- 機敏に的確に行動する。
- 仲間と協力し、責任を果たす。
- 健康安全に気をつけ、節度ある言語動作をする。

また、研究推進のために、家庭・地域の協力を求め、PTA活動の一環として家事手伝い、体力

7		体位測定	保健日より 休み中の保健について	陸上支部予選会	夏休みの健康について 疾病治療の指導 水泳練習について 水泳	プールの 清掃と点 検
8				県中学総体 合宿・登校練習	家庭での生活指導	プール解放 水泳課題 練習	
9	○校内水泳大会 体力測定	体位測定 環境整備 避難訓練 (防災)	保健日より 環境整備 校内水泳大会運営 協力		疾病治療状況調査 水泳大会について 学園祭について 組運動	グランド 整備
10	○学園祭, 運動会 オリエンテーリング 遠足	インフルエンザ	保健日より 学園祭運営協力 展示発表	新人戦	遠足について 野 外 走 球 技 球 技 球 技	
11	研究発表会	体位測定 研究発表会 強歩大会健康診断 インフルエンザ 予防接種	保健日より		強歩大会について 健康観察 球 技 球 技	
12	校内強歩大会	健康講話 避難訓練 (防災)	強歩大会協力 保健日より 休み中の保健について		冬の健康について 講話について 冬休みの過ごし方 縄とび運動について 格 技 ダ ン ス 縄 と び 運 動	
1	スケート教室	体位測定	保健日より		スケート教室について 風邪の予防について 縄 と び 運 動 球 技	
2			保健日より		風邪の予防 球 技	
3		体位測定	保健日より		疾病治療指導	
備考	○は生徒会行事として実施		<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部 保健委員会 体育委員会 		学級指導計画との連携をはかる	<ul style="list-style-type: none"> 行事季節も考慮する 男女、人数、施設により変更する場合ある。 	

保健指導年間計画表

項目	指導目標	ねらい	学級指導		保健行事	生徒活動 委員会の活動	関連する活動
			主な指導事項	内容			
4	・健康な生活	・健康診断を進んで受け健康の自己理解を深める	・身体測定 ・健康診断	・身体測定、健康診断を進んで受けさせる	・定期健康診断 ・身体測定 ・結核検診 ツベルクリン注射 BCC接種 ・職員健康診断 胃検診 ・修学旅行	・生徒保健委員会編成 ・年間計画をたてる ・身体測定の結果を整理する ・健康診断時の手助けをする ・環境整備	・健康カードの活用 ・保健室だよりの発行 ・疾病異常者に対する個別指導 ・修学旅行事前の健康相談と措置 ・女子の生理指導
5	・健康の保持 増進	・健康診断の結果を正しく保って健康の保持増進に努める	・歯の治療 ・視力の精密検査 ・内科の再検診	・自己の発育状況を把握させる ・健康診断の結果を正しく把握させ、進んで治療を受けさせる	・2年生X線撮影 ・定期健康診断の事後措置 ・適足の保健指導 ・歯科医の講話 ・スポーツテスト ・新入生歓迎球技大会	・健康診断の結果の統計と活用 ・保健だよりの発行 ・新入生歓迎球技大会の協力 ・健康調査	・健康相談事後措置と健康相談 ・適足の事前健康指導
6	・歯の保健	・歯の保全と身体の清潔に努める	・歯の講話 ・歯の健康カードの作成	・講話を開かせ歯の健康についての意識を高め、自己の歯の健康に努めさせる	・う歯予防措置 ・体重測定 ・尿検査(1, 3年) ・日本脳炎予防注射 ・校内陸上競技大会	・う歯治療カードの記入をする ・う歯予防のポスター ・保健だよりの発行 ・陸上競技大会協力	・う歯についての認識を深める指導 ・梅雨時の健康 ・保健室だよりの発行 ・健康相談
7	・健康的な夏の生活設計	・伝染病予防に努める ・夏休みを規則正しく過ごす	・健康な生活設計	1年 規則正しい生活の設計をたてる 2年 自己の健康法をとり入れた生活設計をたてる 3年 調和のとれた生活設計をたてる	・林間学校 ・夏休みの健康生活設計 ・夏季治療指導 ・健康カード記入 ・プール管理	・夏休み中の保健だよりの発行 ・健康カードの整理	・林間事前健康診断 ・夏季安全指導(水泳、登山、他) ・健康カード配布 ・保健室だよりの発行
8	・傷害の防止	・傷害の防止に努める	・環境整備 ・準備、整理 ・体操の徹底	1年 教室内の環境整備をさせる 2年 校舎内の環境整備をさせる 3年 校内の環境整備をさせる準備、整理体操の大切さを知らせ実行させる	・発育測定(身長、体重) ・夏季治療の実態調査 ・校内水泳大会 ・スポーツテスト ・貧血検査 ・プール管理 ・風疹予防注射	・保健だよりの発行 ・水泳大会協力 ・発育測定の補助	・夏季休業中の健康調査 ・健康相談 ・安全指導
10	・目の健康	・視力保護に努める	・よい姿勢(机、いすの高さ) ・照度測定	正しい姿勢、適切な照度について知らせ日常生活にとり入れさせる	・目の愛護デー ・学園祭運動会 オリエンテーリング ・遠足	・保健だよりの発行 ・学園祭への協力 ・目の愛護ポスター ・保健統計活用	・適切な照度姿勢についての指導 ・保健室だよりの発行 ・健康相談
11	・感冒予防	・かぜの予防に努める	・健康講話 ・うがいの励行	校医の講話を聞かせ、かぜの予防法について知り自己の生活にとり入れさせる	・感冒予防対策 インフルエンザ予防注射 ・体重測定 ・校内強歩大会	・保健だよりの発行 ・強歩大会協力	・感冒についての保健室だよりの発行 ・健康相談 ・強歩大会事前健康相談
12	・冬季の健康管理	・清潔で安全な生活をする	・環境整備 換気 温湿気	1年 適切な温湿度、換気の必要性について知らせる 2年 適切な暖房のしかたを知らせ生活の中にとり入れさせる 3年 すずんでよい環境づくりにつとめる	・冬休み中の生活設計 ・冬季治療指導 ・暖房用具の準備 ・健康カードの記入	・保健だよりの発行 ・冬休み中の保健ポスター(ストーブ事故) ・室内での生活のし方 ・かぜの調査	・健康な冬休みの過ごし方についての保健室だよりの発行 ・冬休み中における治療完了の指導 ・保温と換気の指導
1	・正しい姿勢	・正しい姿勢を保つ	・寒さと姿勢	1年 よい姿勢の大切さを知らせる 2年 姿勢矯正法を知らせ、よい姿勢をさせる 3年 常によい姿勢を保つようにさせる	・3年生の健康診断 ・冬季の運動傷害防止 ・冬季治療の実態調査 ・体重測定 ・スケート教室	・保健だよりの発行 ・かぜの調査	・冬休み中の治療状況調査 ・健康相談
2	・適切な栄養	・適切な栄養のとり方に努める	・健康と栄養	調和のとれた栄養のとり方を考え生活の中にとり入れさせる	・健康相談	・保健だよりの発行 ・バランスのとれた栄養について	・健康相談
3	・耳の健康	・耳の健康保持に努める	・耳の病気	耳の病気について知り、耳の健康に対する意識を高めさせる	・耳の日 ・健康カード記入 ・次年度保健計画 ・帳簿の整理 ・器具及び薬品の整理	・保健だよりの発行	・保健室だよりの発行 ・健康カード配布

4 研究計画（昭和53年度）

- (1) 前年度の反省と本年度の具体的計画の確立
- (2) 実態調査の分析と比較検討
- (3) 指導計画の再検討と実践
- (4) 施設々備の充実と活用
- (5) 研究・調査資料の整理
- (6) 研究の反省と今後の運営

5 研究内容

(1) 体育面

体育部は、体育行事と全校体育の両面から実施した。体育行事は学校生活に変化と興味を与え、生徒の積極的な活動が期待でき、運営も自主的に行える。従って、単に体力づくりだけでなく自主性や社会的態度の育成のよい場となる。

さらに本校では、体育行事と全校体育を組み合わせて、行事と行事の間には次の行事の練習や基礎体力を養う運動を全校体育として実施しとかく単調であき易い体力づくりが継続しやすいように年間計画を立て、順次実施した。また実践指導にあたっては、保健部と協力し健康安全に充分配慮した。

○ 体育行事

目標 ① たくましい体力づくりと社会性の育成

② 集団意識の高揚と規律訓練

③ 運動に対する積極的態度の育成

体育行事の実施については、昭和53年度は、
 新入生歓迎球技大会（5月）校内陸上競技大会
 （6月）校内水泳大会（9月）学園祭（運動会、
 オリエンテーリング）（10月）校内強歩大会
 （12月）スケート教室（1月）である。一例と

して校内強歩大会についてのべる。

○ 第2回校内強歩大会

① 目標

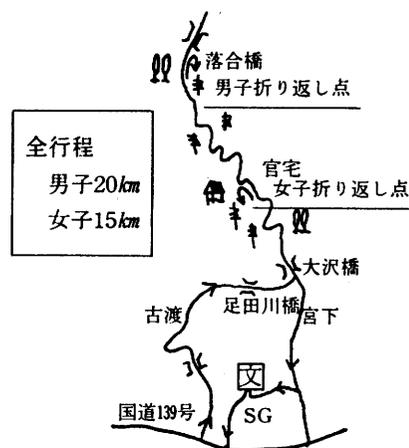
- ・寒さに負けたくないたくましい体力と精神力を養う。（体力・精神力）
- ・自己の身体状態や能力を考慮し、適切なペースで走る。（健康）
- ・定められた集団のルールを守り、交通安全に留意する。（規律）
- ・相互に励まし合い、人間関係を深める(和)

② コース

沖の池方面

男子往復20Km

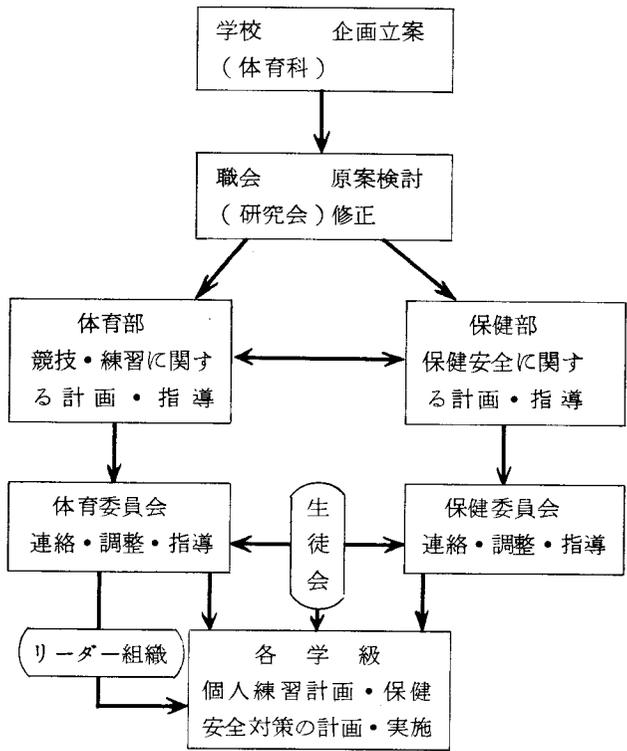
女子々々15々々



記録カード

学年	組	氏名	予想タイム ()
検問所			所要時間
大沢橋			順位
折り返し点			
大沢橋			
学校			

③ 企画立案・指導形態



④ 健康調査・検査

健康調査を行ない、調査によって必要と認められた生徒や本人が希望した者は、養護教諭が引卒し校医の病院で診断し、参加、不参加を決定。更に体育担当者が再点検して万全の態勢で臨んだ。また当日は、各担任がクラスの健康観察を行う。当日の不参加者は、男子4人(前年度14人)女子21人(16人)で全体の約6%(8%)であった。不参加者は記録などの仕事を分担した。競技後、特に身体具合の悪い生徒はなかった。ただし、競技中に、脚が疲れたりしてやめた生徒が2人いた。

記録カード

健康調査カード()学年()	
(該当するものに○をつける)()	
現在病気療養中である	
現在健康状態が思わしくない	
大きい外傷をうけた	
虫垂炎の手術をした	
リュウマチと診断された	
その他	

⑤ 成績表（学年男女10人）

	男 子						女 子					
	1 年		2 年		3 年		1 年		2 年		3 年	
	5 2	5 3	5 2	5 3	5 2	5 3	5 2	5 3	5 2	5 3	5 2	5 3
1	1° 31' 20"	1.39.54	1.27.43	1.24.52	1.26.56	1.25.17	1.28.00	1.22.27	1.25.56	1.19.54	1.29.48	1.22.03
2	1. 33. 30	1.40.59	1.37.34	1.25.10	1.27.35	1.25.45	1.28.32	1.28.07	1.26.30	1.21.36	1.31.05	1.23.35
3	1. 41. 19	1.42.30	1.37.59	1.26.18	1.27.44	1.28.05	1.33.51	1.28.32	1.27.08	1.24.53	1.31.48	1.27.06
4	1. 47. 44	1.45.50	1.39.05	1.30.10	1.28.20	1.31.40	1.33.51	1.28.50	1.31.20	1.29.42	1.33.45	1.30.55
5	1. 47. 44	1.44.00	1.39.50	1.31.08	1.29.50	1.32.50	1.39.26	1.29.02	1.31.32	1.31.24	1.33.50	1.33.25
6	1. 48. 18	1.44.30	1.42.45	1.32.07	1.32.44	1.33.00	1.39.41	1.29.24	1.32.20	1.34.23	1.36.58	1.34.10
7	1. 48. 26	1.44.42	1.44.06	1.32.37	1.32.44	1.33.15	1.39.42	1.29.41	1.34.36	1.35.00	1.37.07	1.34.35
8	1. 48. 49	1.45.12	1.44.09	1.34.40	1.32.48	1.35.10	1.43.47	1.29.52	1.36.25	1.35.00	1.37.46	1.37.22
9	1. 49. 04	1.45.32	1.44.15	1.35.37	1.34.14	1.36.50	1.46.05	1.29.55	1.36.26	1.35.55	1.38.42	1.37.30
10	1. 49. 45	1.47.36	1.45.28	1.35.48	1.36.07	1.37.28	1.46.20	1.33.35	1.36.34	1.36.06	1.39.40	1.38.29
最終	2. 48. 10	2.42.22	2.54.08	2.45.12	2.53.57	2.45.15	2.24.10	2.12.20	2.35.21	2.26.10	2.17.18	2.41.00

・は総合6位入賞者（メダル授与）

⑥ 生徒の作文（3年男子）

3年生や2年生の先輩達にまじって、1年生が必死で頑張っている。顔をしかめ、からだ全体でいっしょうけんめい走っている。僕は恥ずかしくなった。「どうして彼らのように頑張ることができないのだろう」「精神力がないのだろうか」「いや精神力がないのではない。頑張れないわけではない。たゞ自分からやろうとしないだけなんだ」そう思ったから自分がひどく怠け者に思え、彼らとは正面から顔が合わせられないような気がして恥ずかしかった。よし頑張ろう。今までの気持ちを吹きとばそうという思いで必死で走った。しかし、最初からやる気で張り切って走っている人達に、途中で目がさめた者が追いつくわ

けはなかった。でも、必死で走った。途中からでもやろうときめたからには悔が残らないよう頑張りがかった。その気持ちが自分をゴールまで引っばってくれた。ゴールした時、足は棒のようだった。からだはクタクタだったが、心は雲ひとつない青空に吸いこまれそうな、そう快な気分だった。

○ 全校体育

研究テーマ達成をめざして、体力づくりと体育行事間のつなぎの運動、行事に対する練習のため全校体育を実施してきた。以下、その目標と実施種目について述べる。

目標 ① 継続した運動実践を通して体力の向上と活動力を高める。

- ② 運動の生活化を図り、自主的に体力づくりに励む態度を養い、健康管理意識を高める。
- ③ 集団活動での責任ある行動を通し、規律ある態度を養う。

実施種目と時間設定

- 縄とび運動、ボール運動、組み運動、走運動、水泳、陸上競技、ダンス、その他

- 週3目(火・水・木)放課後15~20分間実施にあたっては、生徒の興味を喚起するため各種目のリーダー組織に工夫をし、練習内容表、水泳基準表、マラソンカード、縄とびカード等を作成し、生徒が一人でも練習できるようにした。例として走運動実施要項をのせる。

○走運動(マラソン)

1. 目 標

- イ、体力・運動能力の育成
全身持久力
呼吸・循環機能を高める
筋力の長続き
肺・心臓を強くする。
- ロ、精神力(意志力)の向上
- ハ、健康管理能力を養う
- ニ、社会性の育成

2. 期間及び曜日

10月~11月
毎週火・水・木

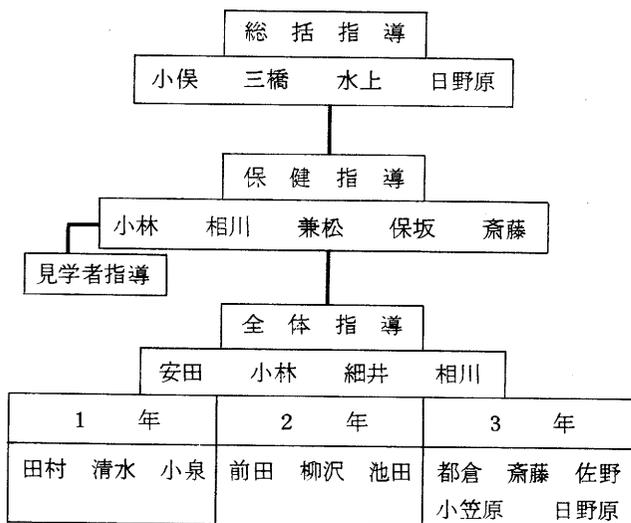
3. 時 間

15:50~16:05

4. 場 所

グラウンド(200トラック)
宝鏡寺コース(2.0Km)
古渡コース(2.0Km)

5. 指導者組織



各クラスのリーダー

1の1	1の2	1の3	2の1	2の2	2の3	3の1	3の2	3の3	3の4
藤江	清水	河野	五味	中野	大井	滝口	斎藤	志村	駒谷
小林	佐藤	加藤	志村	三枝	小俣	佐藤	菊島	渡辺	分部
中野	小俣	津久井	奈良	中野	早川	三枝	木村	斎藤	三枝
松川	天野	天野	古屋	郷田	越石	菊池	天野	白井	郷田

6. 練習内容

日	内 容
10月	200mトラックを走る(3分) 体 操 (3分) 200mトラックを走る(5分) 諸 注意 (4分)
11月 第一週	⊕ペースをつかむため、200mトラックを50mずつに区切り、20秒ごとに放送で合図を流す。
第二週	1年 宝鏡寺コース 2年 200mトラック 3年 古渡コース
第三週	1年 古渡コース 2年 宝鏡寺コース 3年 200mトラック
第四週	1年 200mトラック 2年 古渡コース 3年 宝鏡寺コース
第五週	1年 宝鏡寺コース 2年 200mトラック 3年 古渡コース

学校だより	No. 4	家族のなかで、 責任・協力・自 主性を育てる冬 休みに
	12/23	

冬休みは家庭の中で

いよいよ冬休みです。生徒たちは、長い休みとお正月の解放感に期待しています。

学校でも、この期間は子どもさんを家庭へお返して、家族の中で自分のあり方をたしかめ、一員としての自覚した行動をとるようにと考えており

ます。

暮から正月は、一年の反省と出発の時です。それに、よそへの訪問や来客も多いし、おこずかいも多い時です。礼儀や経済的なしつけもじゅうぶんで、自分のことはきちんとできる子どもに育てたいと思います。子どもにえんりょしないで、親として教えなくてはならないことは信念をもって指導するようおねがいします。

「家の子にかぎって」とか「もうおとなだから」

という放任や、理解ありそうな態度でいないで、話し合える、教えあう家庭生活が送れるようおねがいします。

学校からは、生活と健康上の注意事項と計画反省表をもたせてありますので、よくお読みの上、ご相談ご指導ください。

なわとびしよう うがいしよう

ことしは、暖冬というけれど、悪いかぜがはやるというニュースもあります。お互にかぜをひかないように、健康なからだをつくるようにと、学校では、冬休み中にうがいをすることと、なわとびをすすめています。なぜかなどということは、わかりきっていることです。ただ、続けられない

のがいけないのです。

ことしは、体力づくりの実験校ですから、とくに力をいれて指導しています。家中いっしょにがんばってみてください。

完走99.2% 強歩大会大成功

11月26日に実施した校内強歩大会は、事前の健康調査、練習やコースの調査、さらに当日はPTAの応援まで得て、ほとんど全員が時間内に走りおわられたという大成功を収めました。

入賞は、右の表のようですが、6位までの入賞者は「俊泰賞メダル」を受賞しました。

団体賞は、1位3の3、2位2の2、3位3の2

順位	男 子			女 子		
	氏 名	タ イ ム	組	氏 名	タ イ ム	組
1	中野 誠	1°25'56"	3の2	高橋佐貴子	1°25'56"	2の2
2	小俣幸夫	27'35"	3の2	三枝数子	26'30"	2の2
3	斎藤浩稔	27'43"	2の4	山田千秋	27'08"	2の2
4	藤江康信	27'44"	3の2	早川真由美	28'00"	1の2
5	振屋 至	28'10"	3の2	佐藤治代	28'32"	1の3
6	土屋言幾	29'59"	3の3	渡辺菊江	29'48"	3の3
7	中野 浩	31'20"	1の2	小山田益子	31'05"	3の3
8	三枝春夫	32'44"	3の1	菊地郁代	31'20"	2の4
9	加藤 茂	32'44"	3の1	渡辺美佐子	31'32"	2の2
10	渡辺弘幸	32'48"	3の1	藤沢一美	31'48"	3の3

学校の「保健室」って何こ？ 考えなおそう…

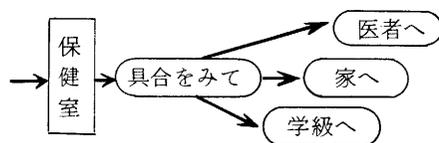
最近、学校の保健室のあり方が考えなおされて来ました。それは、保健室は薬をのませたり、手当をする所であるというまちがった考えが、強ま

って来たからです。

もともと保健室は、生徒の健康管理・健康相談をする所で、緊急な時に応急手当だけをする所です。だから、保健室で手当し投薬するのは、学校

でのけがと急病のときだけで、それも、消毒したり、病気のていどを知るための薬のはんいです。かぜをひいているのに医者へも行かず登校したり、古いきずの手当に来るのは、ぜひしないようおねがいします。

保健室は、学校全体の健康増進や病気予防、それから、ひとりひとりの健康相談などに全力を尽くす本来の使命にもどります。



○ 体育面についての考察

体育面の実践を通して第一に言えることは、生徒達の体育・スポーツに対する関心が以前にも増して高まってきた事である。この傾向は、放課後の部活動への参加状況にもよくあらわれている。積極的な体育行事の運営とその間の全校体育が生徒達の運動をしたいという意識を呼びさまし、運動の苦手な生徒を好きになるきっかけをつくってきたものと思う。体力づくりは、強制されてできるものではなく、また短時間でできるものではない。運動する喜びを知り、集団の中で自分の役割を果たし、毎日の運動の積重ねの中で自己の体力を知ると共に、少しずつでも体力の向上を感じ、自信を持ってゆくことが真の体力づくりにつながると思う。

つぎに、全校生徒や職員もいっしょになって運動をやってきたことで、お互いの感情の交流が深まり、より和やかな雰囲気の中で学校生活がおこなわれるようになってきていることも見のがせない成果だと思う。最後に、規律の面に

ついて見るとまだ不十分な点が多い。研究指定校となり、主題を設定した当初から集合状態がよくない、動作が遅いなどの問題点がいくつか指摘されていた。全校体育の集合時間なども、初めのうちはなかなか守られなかった。また、行事の用具の準備・後片づけなどの係の仕事も教師に指示されてから始めるといった場面もまだ見られる。全体にかなり改善されているがまだ充分とは言えない。集団の中で自己の責任を自覚し、日常生活の中でも実践されるように指導を図りたい。

(2) 保健面

保健面についての実践は、52年度の諸調査の結果から次のような事柄を実施した。

- う歯の治療促進
- 健康だより、保健室だより発行
- 保健講話の実施
- 学級指導における保健指導
- う歯の治療促進

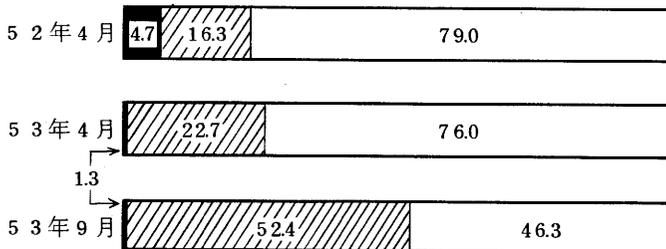
健康な体力をめざす教育実践の中で、過年度に引き続き、う歯治療の徹底を図るために取り組んだ。その結果、校医の協力も得、歯科衛生上の指導も受け治療に通う生徒が多くなった。

一学期の治療に続き特に夏季休業中は通院生徒が多くなり、2学期の治療状況調査では、その治ゆ率は例年にない好結果を示し前年度の22%に比して52%であった。治療はC₁、C₂の軽度の者から始めC₃、C₄の者に至っている。

53年度は4-9月迄

項目	時 学年 年度	4月の歯科検診 (%)				検診後の治療状況 (%)			
		1年	2年	3年	計	1	2	3	計
検査人数	52	128	144	114	386				386
	53	111	126	143	380				380
う歯のない者	52	5(39)	6(42)	7(61)	18(47)				18(46)
	53	3(27)	0(0)	2(14)	5(13)				5(13)
処置者数	52	26(263)	20(139)	17(150)	63(163)	48(375)	32(222)	54(473)	134(347)
	53	28(252)	18(143)	40(280)	86(227)	73(657)	59(468)	67(468)	199(524)
未処置者数	52	97(758)	118(820)	90(790)	305(790)	75(586)	106(736)	54(473)	235(607)
	53	80(720)	108(710)	101(710)	289(760)	35(315)	67(531)	74(517)	176(463)

う歯のない者 
 処置者 
 未処置者 

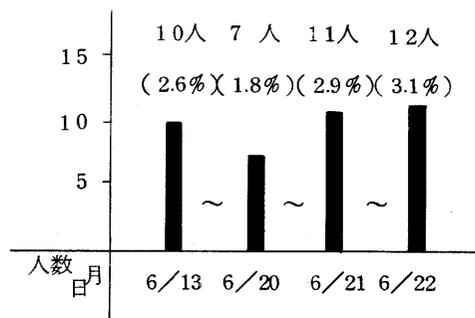


○ 学級指導における保健指導

学級指導における保健指導は、教育活動の全体を通して行なわれる保健に関する指導を補充し、深化し、統合する役割をもっている。そして、学級を単位として担任教師が意図的・計画的な指導を行う場であり、生徒が日常において心身の健康を保持増進するために必要な生活習慣を形成することをめざして行うものである。53年度は保健体育的行事を体力づくりの大きな柱としているので、行事に関連ある事柄を重点的に計画に組み入れて、生徒

が関心の深い行事に積極的に参加する中で、個々に健康について判断し、健康増進の方法を工夫し実践できるよう指導した。

○ 見学生徒の状況(陸上競技の練習)



見学カード

全校体育見学カード 東桂中			
月日	年組	氏名	T・Y
理由			
<div style="text-align: right;">担任印</div> キリトリ線			
全校体育見学カード 東桂中			
月日	年組	氏名	T・Y
理由			
鼻 出 血			
実施要項			
陸 上 練 習			
感想			
担任印			

また、全校体育時の見学者の指導は見学カードをもとに保健室と担任が連絡し合い、個々の状態に応じた処置をとっている。

- 保健面についての考察
- 年間指導計画によって完全に指導していくのに困難さがあり、指導時間のとり方の研究、工夫が必要である。
- 保健の大切さは意識としては持っているが実践を伴わせるために、体験発表や校医等専門家の指導や豊富な資料が認識を深めるのにより効果的であった。
- 習慣化を図るためチェックポイントをきめて指導しているが、定着するために継続的指導が必要である。

(3) 家庭での実践(P T Aとの協力体制)

本校のめざす体力づくり計画を進める上で

学校行事、課外時の体力づくりや教科時での運動が主体となる事は易論ではあるが、究極において、運動の生活化、生涯体育をめざす体力づくり計画である以上、生徒自身が自発的に取り組む体力づくりという面で家庭が保健意識の高揚や体力づくりの実践を学校と協力して行なっていくことが最も重要であろう。子供達の真の幸せを願うために私たちはP T Aに体力づくりの家庭での協力実践を願った。

- イ、各種行事に対する参加と協力
- ロ、保健体育施設々備に対する援助、校内安全環境の整備・美化
- ハ、家庭における勤労、体力づくりの計画実践
- ニ、保健衛生に関する協力と指導
- ホ、家庭での体力づくり実践文の記載

これらを柱として、学校だより、保健だより、学年P T A、学級懇談会等を通し情報を伝達し、子供と共に誰でも、どこでも、いつでもできる体力づくりとして各家庭で実践した。特に夏休みの体力づくりにおいては、家での仕事、運動、その他について家族話し合い日常生活での配慮をし、それらについての感想文をP T A全員に配布し互いに啓蒙し合い、また参考にした。

6 実態の把握

研究を実践する段階で、本校生徒の体力、保健の両面の実態を調査、検査し指導のめやすとした。以下その結果の表・図をのせる。

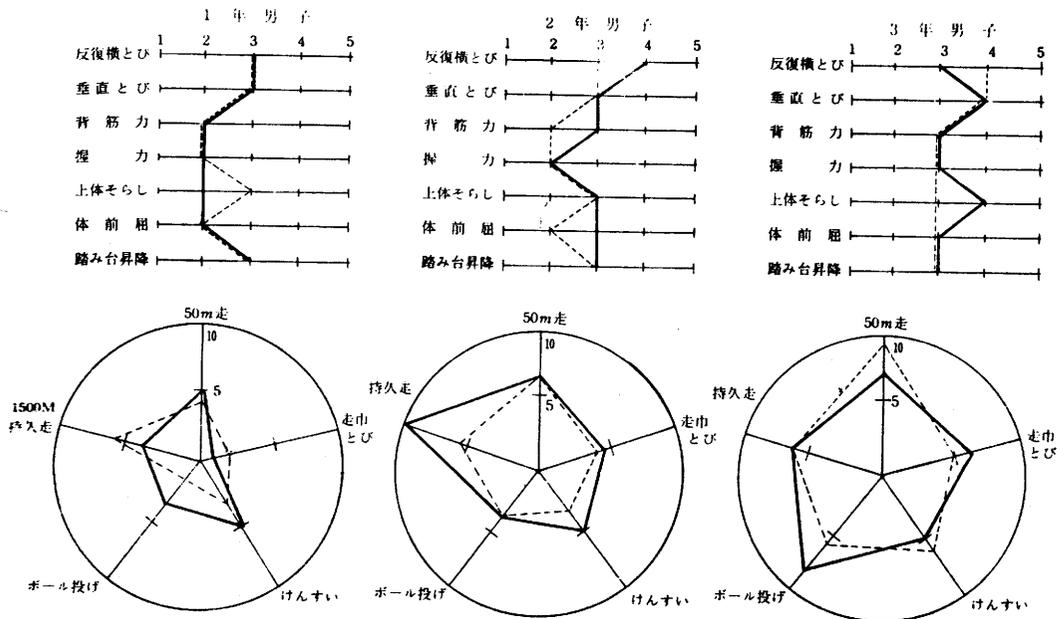
●体力・運動能力テスト

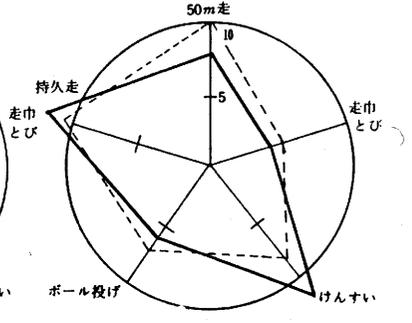
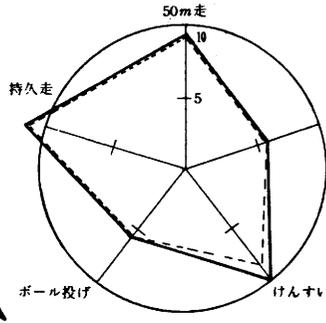
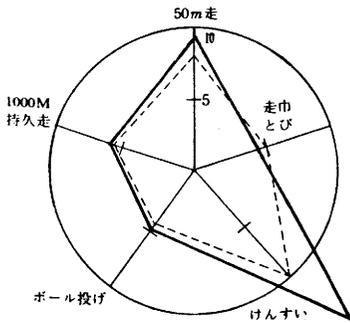
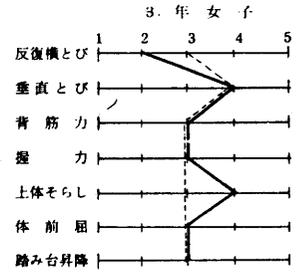
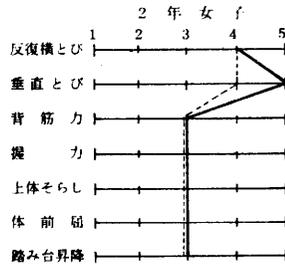
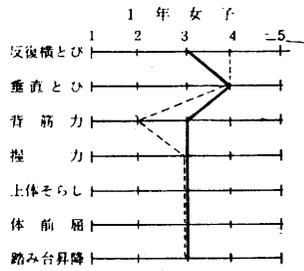
学年	性別	体力診断テスト							運動能力テスト					
		反復	垂直	背筋力	握力	上体そらし	体前屈	踏み台	50M	走巾	けんすい	ボール投げ	持久走	
1	男	52年東桂	34.9	45.2	105.9	29.7	54.4	11.5	66.4	8.3	372.2	3.8	20.2	362.6
		53年東桂	37.3	50.0	101.9	27.7	45.2	10.9	61.6	8.2	333.3	4.7	21.6	397.0
		全国	38.4	44.0	85.9	26.2	49.6	9.7	67.0	8.4	351.7	3.5	19.8	390.3
	女	52年東桂	33.9	46.9	122.8	37.1	54.4	13.1	54.0	8.1	381.7	3.1	23.1	375.1
		53年東桂	41.6	53.0	111.0	32.0	54.6	11.5	68.3	7.9	382.2	5.7	23.5	350.1
		全国	40.9	49.2	97.8	31.2	51.4	10.8	69.0	7.9	384.4	5.0	22.6	374.6
2	男	52年東桂	40.1	55.2	129.5	38.8	56.4	13.2	58.0	7.6	434.5	5.9	25.8	362.3
		53年東桂	39.5	53.6	123.4	38.6	57.6	13.6	64.2	7.7	422.9	5.8	28.4	362.5
		全国	43.0	55.8	117.1	37.9	54.7	12.7	67.7	7.5	416.4	6.8	25.8	362.9
	女	52年東桂	33.4	39.6	65.3	28.1	51.3	14.6	58.7	9.0	317.8	46.5	13.7	287.7
		53年東桂	32.9	38.1	71.9	25.1	57.1	12.8	60.3	8.8	302.0	45.0	14.9	281.0
		全国	35.7	38.7	63.6	23.5	52.7	12.8	64.6	8.9	310.2	29.7	14.7	282.3
3	男	52年東桂	34.2	36.5	72.4	29.1	56.4	15.9	59.6	9.0	314.0	34.4	14.3	290.2
		53年東桂	35.9	44.0	88.0	28.2	56.1	15.4	63.6	8.7	329.9	32.1	15.5	280.2
		全国	37.1	41.1	69.2	25.4	54.4	13.8	62.0	8.7	321.6	28.8	15.5	278.4
	女	52年東桂	35.8	41.1	80.5	30.1	60.7	16.9	55.9	8.7	329.4	36.5	16.1	292.3
		53年東桂	34.9	39.2	87.5	26.1	58.1	16.2	60.6	9.6	315.0	33.1	15.9	278.5
		全国	38.3	43.3	76.6	27.0	56.7	15.0	64.0	8.6	330.3	28.7	16.5	282.6

(53. 9実施)

●体力診断テスト・運動能力テスト
の全国平均との比較

昭和53年9月19日実施
—— 東桂中 ----- 全国



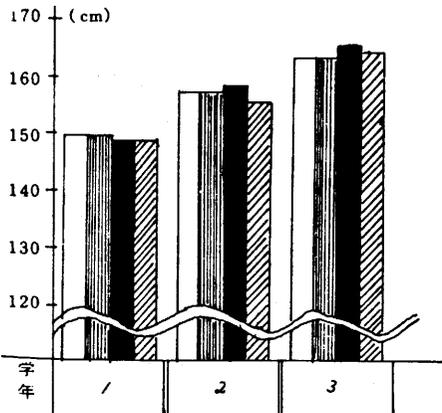


① 昭和52.53年度生徒の体位

学年	年度	項目 比較	身長 (cm)		体重 (kg)		胸囲 (cm)		座高 (cm)	
			男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
一	52年度	全	149.1	150.1	40.3	42.0	71.8	74.0	79.5	81.2
		県	148.9	150.0	40.1	41.6	71.9	73.8	79.4	81.0
	53年度	本	147.5	151.7	38.6	40.8	71.5	71.2	81.1	80.2
		本	147.5	149.5	40.8	43.7	71.7	74.0	79.3	80.8
二	52年度	全	156.6	153.5	46.0	46.0	75.5	76.9	83.2	83.1
		県	156.9	153.1	46.4	45.5	75.5	76.4	83.3	82.7
	53年度	本	158.4	153.4	48.6	47.2	77.5	75.2	85.3	83.8
		本	155.2	153.0	44.5	44.9	75.5	75.1	82.5	82.7
三	52年度	全	162.7	155.3	51.3	48.9	79.2	79.0	86.5	84.1
		県	162.8	155.4	51.6	48.7	79.1	78.7	86.8	84.2
	53年度	本	164.7	155.7	49.9	48.6	80.4	76.5	86.3	84.3
		本	163.7	154.9	54.4	49.8	81.7	77.5	87.5	84.4

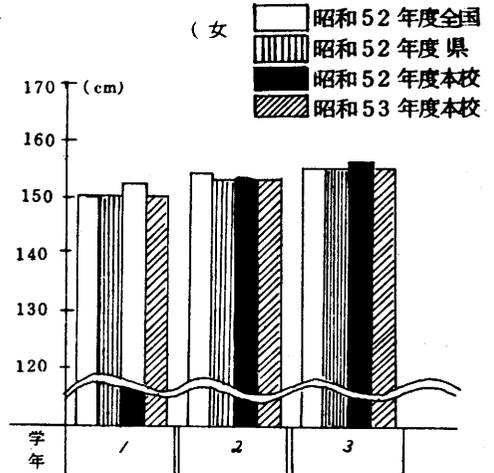
体位比較図

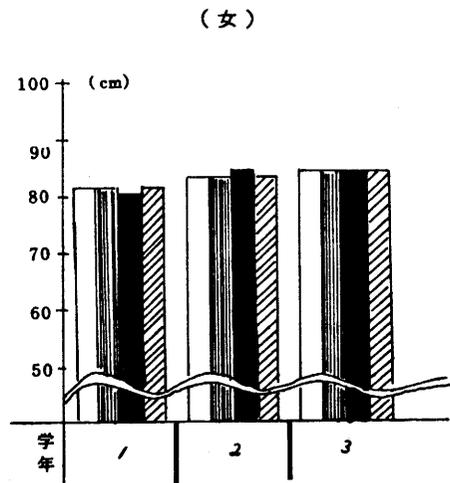
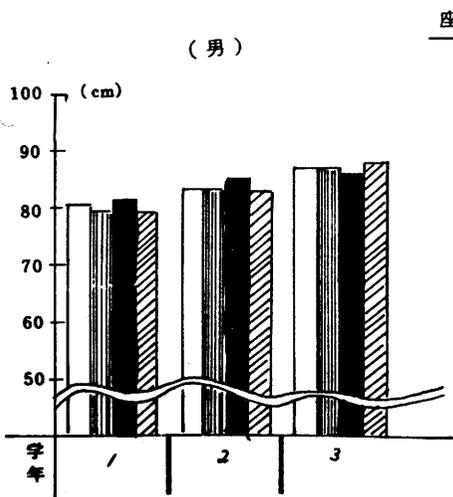
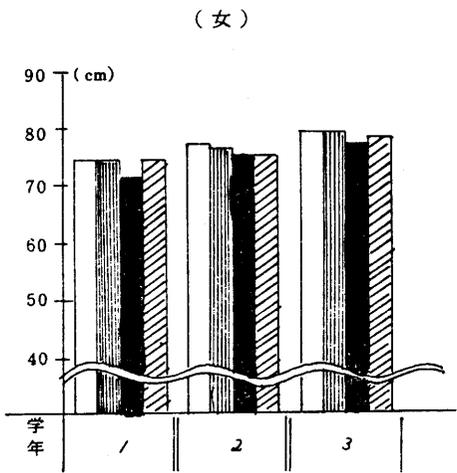
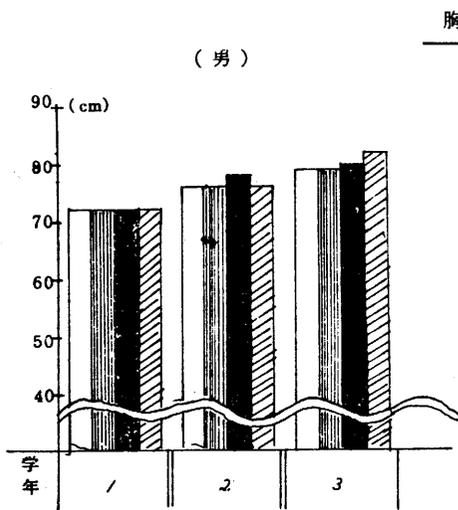
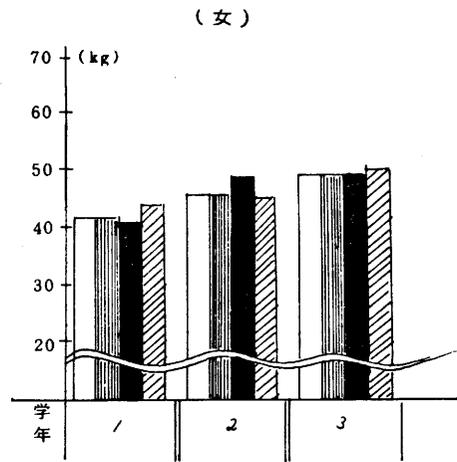
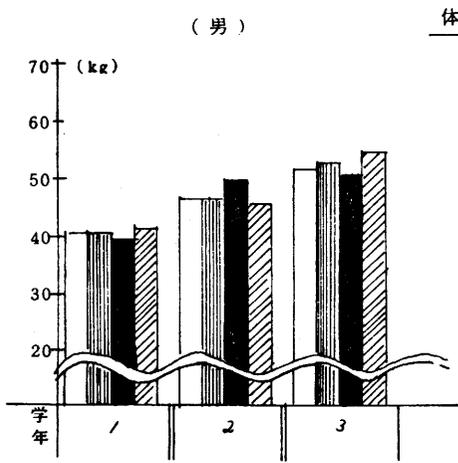
(男)



身長

(女)





◎昭和52・53年度生徒の主な疾病、異常傾向

項 目		1 年		2 年		3 年		合 計									
		男 子		女 子		男 子		女 子		人	%						
		人	%	人	%	人	%	人	%								
調 査 人 員	S52	69		59		69		76		48		66		387			
	53	59		54		69		59		69		73		383			
栄 養 異 常	栄 養 不 良	52	11	1.4	1	1.7	0	0	0	0	1	2.0	0	0	3	0.8	
		53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	肥 満 傾 向	52	0	0	0	0	1	1.4	2	62.6	1	2.0	0	0	4	1.0	
		53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
背 柱 異 常	52	0	0	1	1.7	1	1.4	1	1.3	0	0	0	0	3	0.8		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
胸 部 異 常	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
裸 眼 視 力 1.0 未 満	52	11	15.9	15	25.4	9	13.0	34	44.7	13	27.1	26	39.4	108	27.9		
	53	10	16.9	12	22.2	16	23.1	19	32.2	19	27.5	35	47.9	111	28.9		
色 覚 異 常	52	3	4.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.8		
	53	2	3.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.5		
結 膜 炎	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	53	1	1.6	0	0	2	2.8	2	3.3	0	0	0	0	5	1.3		
難 聴	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
扁 桃 肥 大	52	5	7.2	4	6.8	7	10.0	2	2.6	0	0	0	0	18	4.6		
	53	3	5.1	2	3.7	3	4.3	3	5.1	4	5.8	1	1.4	16	4.2		
歯	検 査 人 員	52	69		59		68		76		48		66		386		
		53	59		52		69		57		69		74		380		
	う 歯 の な い 者	52	4	5.8	1	1.7	3	4.3	3	3.9	5	10.4	2	3.0	18	4.7	
		53	1	1.7	2	3.8	0	0	0	0	2	2.9	0	0	5	1.3	
	う 歯 数	処 理	52	12	17.4	14	23.7	7	10.1	13	17.1	8	16.7	9	13.6	63	16.3
			53	19	32.2	9	17.3	8	11.5	10	17.2	14	20.2	26	35.1	86	22.7
		未 処 理	52	53	76.8	44	74.6	58	84.1	60	79.0	35	72.9	55	83.3	305	79.0
			53	39	66.1	41	78.8	61	88.4	47	82.5	53	76.8	48	64.9	289	76.0
口 腔 疾 病	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
結 核	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
尿 た ん 白	第 1 次	52	1	1.4	2	3.4					3	6.2	2	3.0	8	3.3	
		53	4	6.8	1	1.9					4	5.8	1	1.4	10	3.9	
検 出 者	第 2 次	52	0	0	0	0					0	0	0	0	0	0	
		53	1	1.7	1	1.9					1	1.4	1	1.4	4	1.6	
心 臓 病 疾 患 異 常 者	52	0	0	0	0	0	0	1	1.3	0	0	0	0	1	1.3		
	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1.3	1	1.3		
ツ 反 応 陽 性 者	52					63	91.3	58	76.3	14	29.1	8	12.1	143	55.2		
	53					65	94.2	57	96.7	9	13.0	5	6.8	136	50.3		
貧 血 者	52	1	1.4	2	0	0	0	6	0.8	0	0	3	0.5	12	3.1		
	53	2	3.3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5.2		

7. 研究の反省

本研究を進めてきた段階における問題点の主なものをあげると、例えば、規律の概念については、生活全体にわたっての規律という広い意味でとらえていくのか、体育・スポーツにかゝる規律としてとらえていくのか、かなり論議した点の一つである。前者とすれば、生活指導ともかゝって研究分野が広義になりすぎないかという心配もあった。しかし、体力づくりや運動技能の習得だけが目的でなく、これらの発達や学習が進められる過程における精神力や態度なども十分に体得されることが、体育指導でねらう心身一体の成果のすばらしさであり、人間形成の重要な要素であろうという点で共通理解された。反省点の主なものとして、

- 研究主題が大きく、教育活動全般にわたるため、焦点化が十分でなかった。
- 主題の概念規定と具体化の検討が甘く、実践段階で疑問が生じた。
- 実態把握のための諸調査・検査等に対する細かな検討時間が不足した。
- その他

研究に取り組んで、教職員、生徒、家庭が同じ目標に向かって歩み続けてきたことは大いに意義があったと思う。私達の研究は何ら新しいもの、特別なものをめざすものではなく、どこでも行なっているものである。その中に共通の目標や一本の柱を見だし、それに注目して行なってきた試みである。各校務分掌や各領域で自からねらいを持ちながら、研究目標に向かって努力を重ねてきた。そこに教職員の共通理解が生

まれ、一体となって生徒にむかう姿勢となって表われてきた。

健康な心身を培う教育の実践、これは、一朝一夕で成し遂げられるものではない。

しかし、成長の著しい中学生時期に、自から心や身体に目をむけ、健康な身体づくりに取り組むことは大切である。社会がますます多様化する中で生活していくためには心身ともそれらに対応できる頑健さが必要であり、耐える精神力と、けじめのある生活力をともなった体力こそ、たくましいものであると考える。今後もこの研究から掘り起こした教育的な体験や知識をもとに、一人でも生きられる強い心身と、広い視野をもった人間性豊かな子どもを育てたいと思う。

参 考 文 献

- 文部省 中学校学習指導要領
- 猪飼道夫他 体育の科学的基礎(東洋館出版社)
- 水野忠文他 体育教育の原理(東京大学出版会)
- 松島茂善他 スポーツテスト(第一法規)
- 成田十次郎他 保健体育科教育の科学と理論2(日本体育社)
- 猪飼道夫他 中学校での体力づくり(講談社)
- 松沢平一 体育と人間形成(逍遙書院)
- 体育科教育(大修館)
- 学校体育(日本体育社)
- 健康と体力(第一法規)
- 中学教育(小学館)

体力を高めるための指導は

どのようにしたらよいか

—特に教科体育以外の体育，スポーツ活動を通して—

栃木県立真岡農業高等学校

体育主任 久田 勝 康

〔Ⅰ〕 研究主題

体力を高めるための指導は、どのようにしたらよいか。

—特に教科以外の体育・スポーツ活動を通し—
(主題設定の理由)

近年高校生の体格の向上は著しいものがあるが、その反面体力が伴っていない傾向にあるといわれている。このことは本校の実態からいえることで、体格は漸時向上して県、全国と比べて大差ないが、体力はスポーツテストの結果でみると、ほとんどの種目で劣っている。高校生の現在にいたるまでの生活環境の変化を考えてみると、

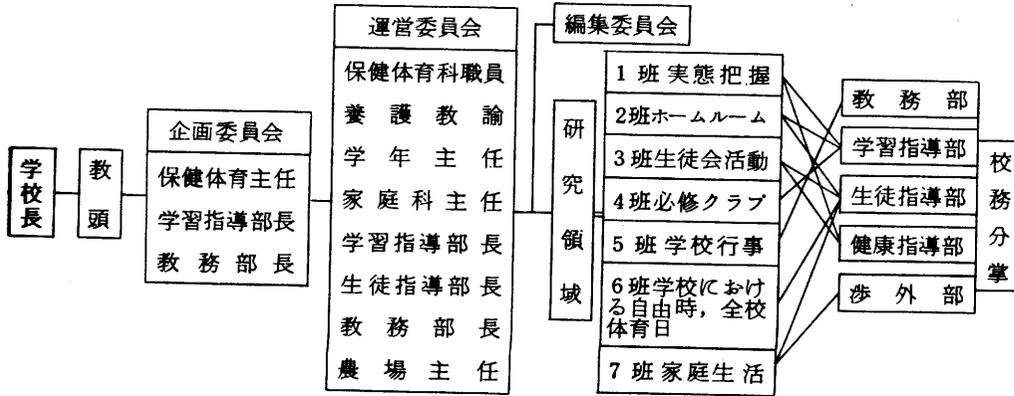
1. 学習内容の高度化により家庭や地域で遊べる時間的余裕がなくなった。
2. 遊び場の絶対的不足と環境の変化によって遊び場が狭められた。
3. 住宅事情の関係で幼児期の運動に制約を受ける学庭の増えたこと。
4. 仕事場と家庭の分離、労働の合理化など家庭の労働生活が変化したこと。
5. テレビ文化の普及などがあげられ、このことが子どもたちの生活意欲に悪影響を及ぼし

かつては家庭や地域社会の生活の中で、培われた体力が身につく機会を奪ってきたものと思う。望ましい身体は体格と体力が均衡よく発達していることであり、この意味での望ましい身体の養成こそ教科体育に限らず教育活動全分野で行なわなければならないことである。このたびの文部省の体力づくり推進校の指定を機に、研究体制を確立し、ホーム・ルーム・生徒会活動、クラブ活動、学校行事等教科体育以外の教育活動、学校における自由時および家庭生活における体力づくりを研究することにした。この体力調査及び運動生活調査によって知ることの出来た実態をふまえ、各領域の研究を推進した。

〔Ⅱ〕 体力づくりの具体的目標

1. ホームルームにおける体力づくり。
2. 部活動における体力づくり。
3. クラブ活動における体力づくり。
4. 学校行事(体育的)における体力づくり。
5. 学校における自由時の体力づくり。

☆研究組織



6. 家庭生活における体力づくり

く態度を養う。

〔Ⅲ〕 体力づくり推進組織

学校教育の全領域において推進していくように校務分掌全般にわたって関連づけ組織を作った。

(2) 体力問題全体に対する関心を高め、社会体育、生涯体育の観点から系統的な自己の体力の維持増進について強い関心を持つ態度を養う。

〔Ⅳ〕 研究の内容

1. ホームルームにおける体力づくり

ホームルーム活動を通して、

- (1) 今日の体力問題を自分達の問題として把握させ、積極的に自己の生活を変革してい

この二点を主たるねらいとし、生徒に対しては体育調査票をもたせ一年次より累加記録をして、あらゆる角度から自己診断、評価を行なわせるとともに、ロングホームルームの年間計画にテーマとしてもりこんで実施することにした。

LHRにおける学年展開について

	LHRのテーマ	ねらい	対象学年		
			1年	2年	3年
一学期	1. ホームルームとしての共同生活の充実に関する問題。	校内球技大会を通して各自の運動能力とクラスの団結をはかる。部活動と勉強の両立について。今日の体力の問題について理解を深める。	○	○	○
	2. 個人の生き方に関する問題。		○		
	3. 個人の生き方に関する問題。				○
二学期	1. 集団の一員としての生き方に関する指導。	十代の非行について、健康問題と生き方と関連させて考えさせる。帰宅後の生活について校内体育大会、強歩大会の意義。	○	○	
	2. ホームルームとしての共同生活の充実に関する問題。		○	○	○
三学期	1. 集団の一員としての生き方に関する問題。	社会体育、生涯体育の意義を理解させる。自己の体力をみつめよう。			○
	2. 集団の一員としての生き方に関する問題。		○	○	

体 育 調 査 票

氏名		住所		生年月日	年 月 日生
通学方法	一年 (分)	二年 (分)	三年 (分)	保護者の職業	

体 格				所属部活動名	所属クラブ名
学年	1 年	2 年	3 年	一年	一年
身長	cm	cm	cm	二年	二年
体重	kg	kg	kg	三年	三年
胸囲	cm	cm	cm		
座高	cm	cm	cm		

運動能力テスト

学 年	1 年		2 年		3 年	
実施年月日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日
記録・得点	記録	得点	記録	得点	記録	得点
50 m 走	秒		秒		秒	
走り巾とび	cm		cm		cm	
ハンドボール投げ	m		m		m	
けんすい腕屈伸	回		回		回	
斜けんすい腕屈伸	回		回		回	
持久走()	分 秒		分 秒		分 秒	
合 計						
級 別 判 定						

体力診断テスト

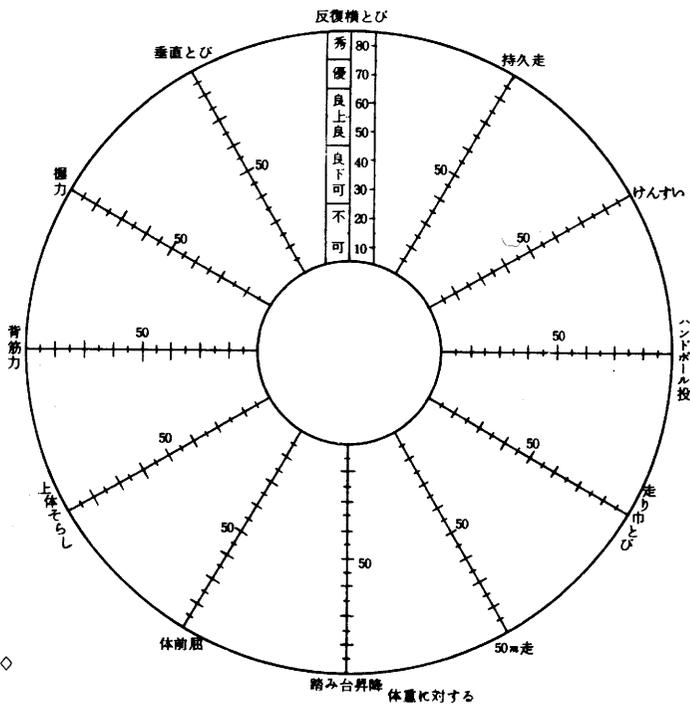
学 年	1 年		2 年		3 年	
実施月日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日
記録得点	記録	得点	記録	得点	記録	得点
反復横とび	回		回		回	
垂直とび	cm		cm		cm	
背筋力	kg		kg		kg	
握力	右 平均 左 平均	kg	右 平均 左 平均	kg	右 平均 左 平均	kg
伏臥上体そらし	cm		cm		cm	
立位体前屈	cm		cm		cm	
踏み台昇降運動	① ② ③		① ② ③		① ② ③	
	回 回 回		回 回 回		回 回 回	
	合計	回	合計	回	合計	回
合 計						
総 合 判 定						

自己診断 (運動能力, 体力)

一 年	二 年	三 年
--------	--------	--------

◇ 体力、運動能力プロフィール ◇

	T - Score					
	1 年		2 年		3 年	
	5 月	10 月	5 月	10 月	5 月	10 月
反復横とび						
垂直とび						
背筋力						
握力						
伏臥上体そらし						
立位体前屈						
踏み台昇降						
50m 走						
走り巾とび						
ハンドボール投げ						
けんすい						
持久走						



◇ 図表による自己評価 ◇

身長に対する

	1 年		2 年		3 年	
	5 月	10 月	5 月	10 月	5 月	10 月
50 m 走						
走り巾とび						
ハンドボール投げ						
けんすい						
持久走						

体重に対する

	1 年		2 年		3 年	
	5 月	10 月	5 月	10 月	5 月	10 月
50 m 走						
走り巾とび						
ハンドボール投げ						
けんすい						
持久走						

生活意識調査

調査項目	男子		女子	
	1年次	3年次	1年次	3年次
1. 日常生活に対する感じ方				
ア 毎日、毎日、充実している。	1人	2人	2人	6人
イ 気持ちはあるが、実行できない。	15	18	21	10
ウ さほど努力していない。	16	13	14	22
エ 充実させようなどと考えない。	8	7	2	1
2. 日没後の外出、外泊について				
ア よく外出する。	7	0	0	0
イ よく外泊する。	2	0	0	0
ウ 時々、外出する。	13	20	10	11
エ 全くない。	18	20	29	28
3. 床につく時間について				
ア いつも決まった時間にねる。	5	8	6	9
イ 努力はしているが、守れない。	13	10	9	6
ウ 努力していない。	8	4	3	6
エ 決めていない、まちまちである。	14	18	21	18
4. 自分自身のからだについて				
ア 健康体であると思う。	17	24	17	26
イ 虚弱体質で悲観している。	7	1	2	0
ウ 時々、風邪などひきやすい。	10	9	17	9
エ 健康体でないので、努力している。	6	6	3	4
5. 健康を保持するために、心がけている。				
ア 自信があるので、必要性を感じない。	2	3	2	8
イ 必要と思うが、続かない。	18	22	21	21
ウ 毎日、体力向上を旨とし、努力している。	3	6	2	2
エ 無関心である。	17	9	14	8
6. からだを動かすことについて				
ア 好きである。	24	31	34	35
イ 嫌いである。	11	4	4	2
ウ 汗を流す必要性を感じない。	5	5	1	2
7. テレビ視聴時間について				
ア 1時間以内	3	10	1	0
イ 1～2時間	5	14	8	17
ウ 3～4時間	21	13	25	16
エ しょっちゅうみている。	11	3	5	6
8. 医療的な目的以外で、鎮痛剤などをのんだことがあるか。				
ア ある。	2	0	1	0
イ ない。	38	40	38	39
9. 朝食について				
ア 毎日、きちんととる。	30	35	28	37
イ 時々、とる。	3	3	9	2
ウ とらない。	7	1	1	0
エ 飲み物くらい。	0	1	1	0
10. 集会で倒れたことは				
ア 1～2回はある。	10	3	2	1
イ いつも倒れそう。	1	1	1	1
ウ ない。	29	36	36	37

2. 部活動における体力づくり

部活動における諸問題を解決することにより、多くの生徒をその生徒をその活動に参加させ、積極的に体力づくりを行なう態度を養った。

(1) 部活動に参加しない生徒の理由

部活動運動部に参加しない生徒全員(男子290名、女子164名)に対し下記の項目について調べた。(いくつでも該当するものを選ばせた。)

項	目	男	女
1	練習が厳しそう(激しそう)なので、からだをこわすといけないから。	12人	4人
2	練習に多くの時間をうばわれるため、趣味やけいごと、その他自分の好きな活動が出来なくなりそうなので。	114	40
3	練習時間が長いので勉強にさしつかえるため、又疲れて帰っても勉強にならないため。	24	36
4	部の規則が厳しすぎる。	15	6
5	自分の望んでいる練習目的(対外試合に出たい、或いはレクリエーションとしてやりたいなど)と異った目的で実際の練習が行なわれているので。	12	12
6	自分の思うように練習しようとしても、それは許されそうもないので。	15	4
7	施設や用具が少なく、又教えてくれる先生や上級生、コーチがいないので充実した練習が出来そうもないので。	12	10
8	運動部に入ると自分で負担する経費がかさみすぎるので。	18	8
9	入りたい部はあるが顧問の先生が厳しすぎるので。	3	2
10	入りたい部はあるがその「きっかけ」をつかめない。	30	7
11	からだが弱く病気がちなので。	3	4
12	運動よりも他にやりたい趣味やけいごとがあり、それらの方が好きだから。	69	64
13	運動は好きだがしょうずでない、又選手になれそうもないので部に入ってもおもしろくない。	15	21
14	もともと運動は好きでない。	18	16
15	入りたい部はあるがその部にうるさい上級生やいやな人が入っている。	3	2
16	運動部活動は余り価値がないように思われるので。	3	1
17	文化部の方が価値があるように思われるのでその方に入っている。	6	4
18	気の合った仲の良い友達が入らない。	30	18
19	家が学校から遠いので部に入ってもかえりが遅くなったりして思うように練習が出来そうもない。	84	68
20	家の手伝いなど家庭での都合で思うように練習に参加出来そうもない。	36	12
21	家の人、その他自分のことを考えてくれる人や友人の意見にひかれて。	9	2
22	先生、その他学校側から部に参加しないように言われた。	0	0
23	進学や就職のための受験勉強のことを考えると運動部のことなど考えていられない。	3	8
24	学校での勉強やその準備、或いは勉強のことばかり言われるので部に入りたいと思っても、そんな時間的な或は心の余裕など全くない。	3	1
25	学校全体が勉強のことだけに重点をおいているようで、部活動などに参加すると変な目でみられたり他の友達においていかれそうなので。	0	0
26	特別に思いあたるわけではなく、ただ何んとなく。	43	20
27	そのほか気に入った部がない、好きだが上手でない。	18	4

この調査を分析すると、1～9までの経営体(学校)の問題35.7%、10～17までの主体(生徒個人)の問題27.4%、18～25までの地理的、家庭的、社会的(人間関係)な問題が36.9%になる。

(2) 部活動を途中で退部した生徒の理由

項	目	男	女
1	練習がきつかったので。	14人	7人
2	練習に多くの時間がうばわれ、趣味やけいごと、その他自分の好きな活動をする時間が思うようにとれなかった。	47	14
3	練習に多くの時間をうばわれ、勉強にさしつかえることが多かった。	4	4
4	部の規則がきびしく、それにしぼられることが多かった。	3	3
5	部の練習目的が自分の考えたり望んでいたものとかげはなれていたので、	10	8
6	自分の思うように(かるく又は激しく)十分な練習が出来なかった。	11	4
7	施設や用具が少なく、思うように練習が出来なかった。	7	1
8	自分で負担する経費がかさみすぎた。	4	3
9	よく教えてくれる人(先生や上級生など)がいなくてしっかりと練習が出来なかった。	6	1
10	選手になりたいと思っていただけにならなかった。(なれそうもなかった。)	4	5
11	その部にうるさい上級生やいやな人がいた。	2	2
12	運動が上手にならなかった。	18	9
13	からだが弱く病気がちだったので、或いはからだをこわした。	6	2
14	好きな友達がやめてしまったので、気の合った練習仲間がでなかった。	17	3
15	もともと運動は好きでなかった。	12	1
16	運動部には余り価値がないように思われた。	4	0
17	文化部の方が価値があるように思われ、その方へ移るため。	5	2
18	家が学校から遠いため、かえりが遅くなったりして思うように練習に参加できなかった。	7	1
19	家の手伝いなど、家庭のついでで思うように練習に参加できなかった。	25	21
20	進学や就職のための受験準備のことを考えると、運動部活動のことばかり考えていられない。	12	8
21	学校でも家庭でも勉強のことばかり口にされ、又友だちが熱心に勉強しているのを見ると、運動などしては行かれないようになった。	3	0
22	クラスや学校全体が勉強中心の雰囲気や運動などやっていると変な目でみられるような気がした。	0	0
23	先生や学校から部をやめるように言われた。	3	0
24	家族やその他の人から部をやめるように言われた。	5	13
25	そのほか	12	7

この調査結果を分析すると、1～9までの経営体(学校)の問題4.19%、10～18までの主体(生徒個人)の問題27.8%、19～24までの地理的、社会的(人間関係)は問題30.3%になる。

(3) 問題解決の工夫

(1)、(2)の問題点は少なからず部活動が不活発になることであるので、次のア～エのように問題解決の工夫を試みた。

ア 経営体に帰因する問題解決の工夫

(ア)指導顧問教師の充実

全職員が部活動の顧問になり、活動中の顧問不在を少なくする。

(イ)施設、設備の充実

生徒の要求を入れ、屋外便所の設置

(ウ)部員相互及び顧問教師との融和

(エ)個人負担の軽減

クラブ後援会の設置とマイクロバスの購

入により、交通費の節減と消耗品費等の個人負担を軽減した。

(オ)意識の高揚

体育的内容の講演会の実施

イ 主体に帰因する問題解決の工夫

(ア)入部の適正化

(イ)健康チェック

う歯保有者に対しては、長期休養中歯科校医による特別治療日を設け優先的療を行っている。

(ウ)個人差に応じた指導の徹底

(エ)発表会の開催

学校祭の折、一般公開試合を行う。

ウ 地理的、家庭的、社会的な問題に帰因する問題解決の工夫

(ア)父兄に対し、理解と協力の働きかけP T-

A総会時に部活動生徒の父兄会を実施す

る。また部毎に随時父兄会を行っている。

(イ)地理的な問題

活動時間の短縮

(ウ)先輩後輩間の封建的なタテのつながりをなくする。

エ 新設部の設置

(4) 実施結果

問題解決の工夫をもとに実施した結果、

年次別に次のような運動部加入者数が得られた。

実施結果

問題解決の工夫をもとに実施した結果、年次別に次のような運動部加入者数が得られた。

()内数字は女子

部 名	年 度	昭 和 5 1 年 度			昭 和 5 2 年 度			昭 和 5 3 年 度		
		5 月	2 月	増 減	5 月	2 月	増 減	5 月	1 2 月	増 減
野 球		16	10	- 6	20	15	- 5	20	23	+ 3
陸 上 競 技		14(1)	9(0)	- 5(-1)	15(2)	14(2)	- 1(0)	12(5)	20(5)	+ 7(0)
バレーボール		16(16)	11(16)	- 5(0)	15(20)	15(20)	- 0(0)	20(18)	20(18)	0(0)
バスケットボール		17(13)	11(10)	- 6(-3)	18(19)	16(18)	- 2(-1)	20(14)	17(14)	- 3(0)
バトミントン		25(16)	18(13)	- 7(-3)	19(17)	17(14)	- 2(-3)	20(23)	18(17)	- 2(-6)
サ ッ カ ー		32	25	- 7	33	31	- 2	29	32	+ 3
テ ニ ス 軟		18(10)	15(8)	- 3(-2)	12(12)	11(11)	- 1(-1)	10(15)	10(15)	0(0)
テ ニ ス 硬		12	10	- 2	12	12	0	18	17	- 1
卓 球		16(12)	10(10)	- 6(-2)	23(18)	20(17)	- 3(-1)	19(10)	18(10)	- 1(0)
剣 道		18(8)	12(3)	- 6(-5)	14(10)	12(8)	- 2(-2)	14(6)	14(6)	0(0)
柔 道		10	8	- 2	10	8	- 2	18	17	- 1
弓 道		9(0)	8(2)	- 1(+2)	13(6)	13(6)	0(0)	21(6)	20(6)	- 1(0)
ワンダーフォーゲル		11(9)	11(5)	0(-4)	11(5)	10(5)	- 1(0)	11(7)	11(7)	0(0)
水泳同好会		8(1)	8(1)	0(0)	5(0)	5(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
合 計	男(女)	222(86)	166(68)	-56(-18)	220(109)	199(101)	-21(-8)	232(104)		+ 4(-6)
	全体(%)	308(43.5)	234(33.1)	-74	329(48.0)	300(43.8)	-29	346(50.6)		-2
生 徒 数		708(男448・女260)			685(男443・女252)			683(男431・女252)		

また、各年度における主な大会での成績は次の通りである。

年度 部名	昭和51年度	昭和52年度	昭和53年度 1月現在
バドミントン	関東大会団体 3位 全国高校総体個人ダブルス ベスト8 関東選手権個人ダブルス優勝 全日本総合選手権個人ダブル ス2回戦 県新人大会個人ダブルス準優 勝 女子団体準優勝、女子 シングルス準優勝	関東大会団体3位女子団体3位 全国高校総体個人ダブルスベスト16 関東ブロック予選団体優勝 関東選手権個人ダブルス準優勝 県新人大会団体準優勝、ダブル ス優勝 国民体育大会少年男子準優勝	関東大会団体優勝 県下高校総合体育大会団体優 勝、女子3位、シングルス優勝 全国高校総体団体ベスト16 県新人戦男子優勝、女子準優 勝
陸上		県下高校学年別大会円盤投げ優勝 新人大会円盤投げ優勝 市内駅伝優勝	関東大会円盤投げ5位 全国高校総体出場
弓道		関東地区大会団体優勝 日光大会個人優勝 中部地区個人準優勝	関東大会県予選団体3位 関東大会出場
柔道		新人大会団体3位 個人戦3位	関東大会県予選団体4位 関東大会出場

3. クラブ活動における体力づくり

週一時間の体育的クラブ活動の実情では、時間的制約があり、あまり効果を期待することはできないが、このテーマの内容を次のように行なった。

- (1) 日頃部活動で運動部に所属していない生徒を体育的クラブに参加させて、運動に対して興味と関心を持たせる。
- (2) 運動の生活化をはかる。
- (3) 生涯体育へ発展させる。

この結果、運動(スポーツ)に興味を持ち、運動(スポーツ)を実践するようになった者はアンケート調査の結果 $\frac{2}{3}$ を占め「何の変化なし」を大きく上まわっており、

必修クラブにおける体力づくりはかなり目的を達しているといえる。

4. 学校行事(体育的)における体力づくり

学校における体育的行事の意義や目的をふまえて体力づくり実践のため、主に次の点について工夫、改善を行なった。

- (1) 運営の組織を確立

全校の職員、生徒が一体となって円滑な推進が出来るよう、又特に自主性を高めるため、生徒会活動(体育委員会)の充実をはかった。

- (2) 行事の適正化

年間における理想的な行事の種類と時期を検討した、次の体育的行事を計画した。

- オリエンテーリング(一年生全員) 4月
- 球技大会(全生徒) 5月
- スポーツテスト(全生徒) 5月, 10月
- 体力づくり講演会(全生徒) 5月
- 教育キャンプ(一年生全員) 7月
- 水泳大会(全生徒) 9月
- 徒歩遠足(一, 三年生) 月
- 運動会(全生徒) 11月
- 強歩大会(全生徒) 12月
- スケート教室(希望者) 1月
- スキー教室(三年生) 1月

自校体操 15種目の徒手体操
 なわとび 4月~10月
 持久走 11月~ 3月
 (男子3Km, 女子1.5Km)

- (2) 学校施設 用具の開放
 - ア 体育館, 校庭の開放
 体育館の昼休み開放については, 学年別に曜日をきめ使用させる。(3年月, 木2年火, 金, 1年水, 土)
 - イ 用具の開放
 正課体育の教材用具の開放

5. 学校における自由時の体力づくり

学校での自由時における「体力づくり」は生徒の自主的な活動であり, 運動の生活化である。しかし, 本校のように農業高校においては農場での実験実習により自由時の体育は制約をうけ, その活動も低調になりがちである, このことから次の方策をとった。

(1) 自由時間の確保

(ア) 全校体育日の実施

全校生徒を対象に週一回, 意識の高揚, 集団行動(規律指導), 体力づくりをねらいとして実施。

(ア) 実施日と時間

a 毎週水曜日

b 特別日課表により実施

校庭集合	8:40
体力づくり	8:40~ 9:00
SHR	9:00~ 9:05
清掃	9:05~ 9:15
1時限	9:20~10:10

(イ) 内容

(3) 意識の高揚

- ア 体力づくり講演会の実施
- イ 掲示による発表
 栄光の記録, 板の設置

6. 家庭生活における体力づくり

最近, 一般社会, 家庭において体力づくりの熱が高まりつつあり, 地域での体育的行事や催し物が多くなって来ている。しかし, 運動生活調査によって本校生徒の実態を把握してみると余り望ましい結果が得られなかった。これらのことから下記方法により多くの生徒が積極的に参加し, 「体力づくり」をするよう推進した。

(1) 地域における体力づくり行事への積極的参加を奨励する。

- 「家庭だより」の発行による。(行事の紹介, 家庭における体力づくり運動種目の紹介等)

(2) 体力づくり講演会(PTA行事)の実施により父兄, 生徒の意識の高揚

- 52年4月実施

演題 体力づくりについて

講師 筑波大学体育専門学群長

松田岩男先生

○53年9月実施

演題 青年期と体力づくり

講師 スポーツ功労特別指導委員

君原健二氏

16才、17才、の握力、踏み台昇降運動に優れている。また昭和51年度入学生徒の3ヶ年の体力の変容とその推移をみると別表のようであり、男女共に種目によってはその発達に問題がみられる面もあるが総体的にみると望ましい発達といえよう。推移についてみると、ほとんどの種目で県、全国の推移を上回っており、各領域における研究工夫から生まれた成果が互いに影響し合い望ましい体力の向上を作りだしたいと考えられる。また、教育の場である学校において全職員が体力づくりという一つの目標達成のため協力して指導に当たれたことと、その指導体制と相まって生徒が自身の体力の向上に関心を持ち、意欲的に生活するようになったこともあげられる。

〔V〕 推進成果

別表(体力診断, 昭和53年5月)のように本校生徒の体力は推進当初の結果に比べ全体的に県全国との差がなくなってきた。特に男子では17才で反復横とび、背筋力、握力、踏み台昇降運動の4種目に優れた結果が出た。女子では15才、

(参考資料)

体力診断 (男子)

昭和53年5月

種目	年令比較	15才		16才		17才	
		M	SD	M	SD	M	SD
反復横とび	全 国	44.8	4.75	45.6	4.29	46.3	4.70
	県	44.39	4.20	46.65	4.63	46.7	5.00
	本 校	43.49	4.19	46.6	3.88	◎47.73	3.85
垂 直 と び	全 国	58.6	7.71	61.1	7.48	63.0	7.38
	県	58.74	7.08	60.89	7.11	63.12	6.94
	本 校	58.6	7.71	54.81	6.57	55.81	5.36
背 筋 力	全 国	122.7	22.16	132.3	22.60	136.5	22.50
	県	124.41	21.85	128.91	23.60	136.55	22.78
	本 校	118.22	16.97	128.3	19.01	◎137.10	15.44
握 力	全 国	41.8	6.74	44.4	6.06	45.1	6.77
	県	41.97	6.25	44.44	6.19	46.03	5.99
	本 校	41.50	6.08	◎44.74	6.25	◎48.99	5.68
踏 み 台 昇 降 運 動	全 国	64.6	12.10	65.9	12.75	66.1	13.24
	県	67.49	13.21	65.25	12.79	66.48	13.36
	本 校	◎72.01	9.92	◎68.15	9.88	◎69.36	11.19
伏 臥 上 体 所 在 体 屈	全 国	55.6	8.30	58.4	7.79	60.4	7.08
	県	55.33	7.71	58.18	7.87	58.86	7.78
	本 校	52.14	7.59	57.72	7.13	55.53	6.9
立 前 位 体 屈	全 国	14.2	5.35	15.8	5.28	16.3	5.12
	県	13.5	5.15	14.89	5.22	15.51	5.08
	本 校	12.43	4.96	14.59	4.97	◎16.45	4.83

◎……県、全国よりすぐれているもの。

体力診断 (女子)

昭和53年5月

種目	年令比較	15才		16才		17才	
		M	SD	M	SD	M	SD
反復横とび	全国	39.27	3.74	39.7	4.10	40.4	4.49
	県	39.95	3.96	40.65	3.69	41.26	3.87
	本校	◎40.4	2.27	40.3	2.38	40.1	3.07
垂直とび	全国	43.8	5.91	44.0	5.75	44.4	5.99
	県	43.62	6.02	43.47	6.02	43.98	5.96
	本校	43.6	4.96	42.9	4.35	44.1	3.99
背筋力	全国	78.9	17.03	81.5	16.14	84.5	17.64
	県	80.13	17.43	84.05	17.73	86.16	17.25
	本校	80.0	13.59	◎88.4	16.14	85.3	12.27
握力	全国	28.3	4.90	28.9	4.91	29.1	5.14
	県	28.05	4.71	29.24	5.09	29.50	5.08
	本校	◎30.9	4.06	◎31.2	4.22	◎31.8	4.06
踏み台昇降運動	全国	60.5	11.41	60.5	10.82	61.0	13.11
	県	61.91	11.26	62.10	11.32	63.25	11.27
	本校	◎68.2	11.54	◎64.5	9.30	◎68.8	10.79
伏臥上体しそ	全国	58.1	7.30	59.3	6.98	59.6	7.20
	県	58.06	6.80	59.08	6.60	60.3	6.42
	本校	56.1	6.10	59.3	7.46	59.2	6.20
立位体屈	全国	16.3	4.77	17.2	4.66	18.0	4.40
	県	16.62	4.83	17.60	4.73	17.79	4.68
	本校	16.2	5.16	15.7	5.06	16.9	3.88

◎……県、全国よりすぐれているもの。

運動能力診断

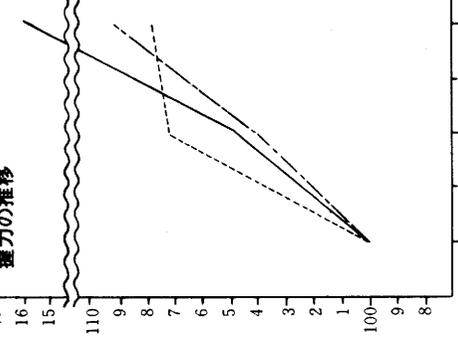
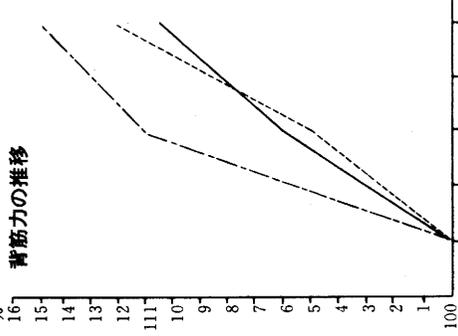
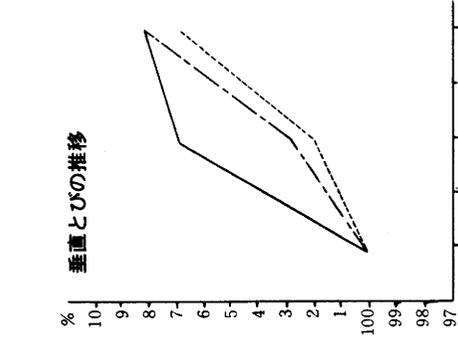
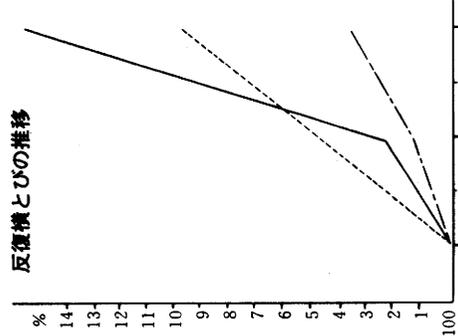
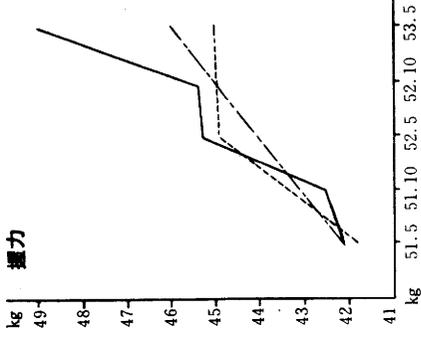
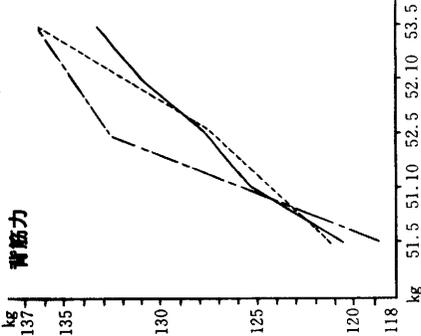
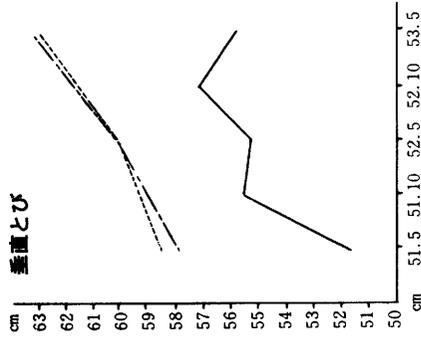
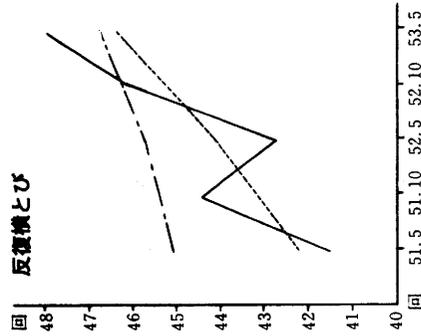
昭和53年5月

年令	種目比較	50m走		走り幅とび		ハンドボール投げ		懸垂		持久力		
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
15才	男子	全国	7.3	0.50	44.131	44.81	27.6	4.95	7.4	3.62	335.1	30.29
		県	7.39	0.48	44.149	42.22	26.50	4.31	7.64	3.99	354.29	30.16
		本校	7.44	0.42	39.70	38.00	26.02	3.63	6.62	3.70	◎350.99	27.44
	女子	全国	8.6	0.43	32.84	31.67	16.8	3.53	30.2	12.30	28.22	23.06
		県	8.58	0.55	33.528	34.80	16.98	3.08	30.97	11.34	27.773	25.15
		本校	8.59	0.52	◎34.22	33.63	16.4	2.97	28.8	9.57	◎270.3	19.86
16才	男子	全国	7.2	0.46	45.46	41.17	28.6	4.56	8.7	3.86	352.2	29.23
		県	7.32	0.47	45.254	43.21	27.45	4.08	8.51	3.84	357.71	32.71
		本校	◎7.2	0.46	◎45.46	41.17	◎28.6	4.56	◎8.7	3.86	352.2	29.23
	女子	全国	8.5	0.54	33.59	32.08	17.4	3.19	31.8	12.48	28.01	24.82
		県	8.53	0.64	33.720	34.34	17.78	3.12	34.09	12.12	28.000	25.35
		本校	8.6	0.46	33.56	33.1	17.4	2.95	29.4	16.10	◎276.5	19.47
17才	男子	全国	7.1	0.40	46.59	44.39	29.1	4.43	8.8	3.90	356.0	34.36
		県	7.19	0.44	46.500	43.68	28.64	4.31	9.13	3.91	358.21	32.07
		本校	◎7.1	0.29	45.86	38.92	28.38	5.24	8.8	3.86	◎338.99	21.76
	女子	全国	8.5	0.50	33.57	36.44	17.6	3.43	33.5	12.04	28.35	25.19
		県	8.54	0.59	33.931	34.50	18.32	3.08	34.02	11.30	28.050	24.49
		本校	◎8.5	0.45	33.67	29.45	17.8	2.91	32.7	11.68	◎277.6	22.68

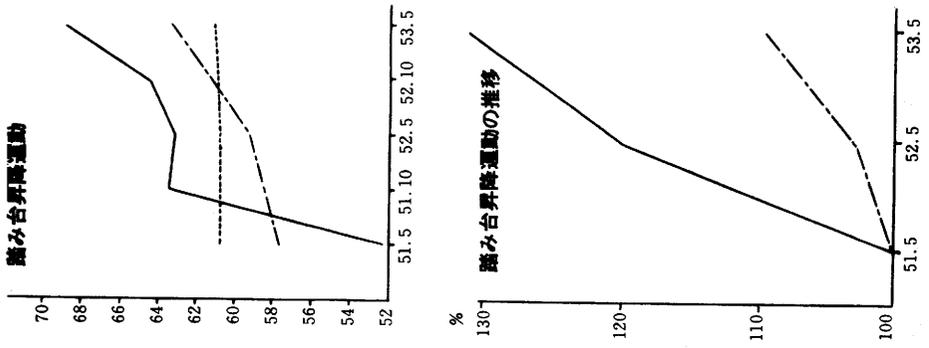
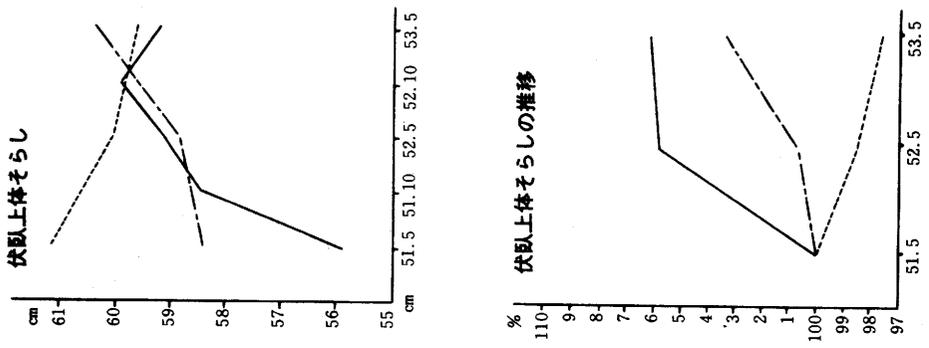
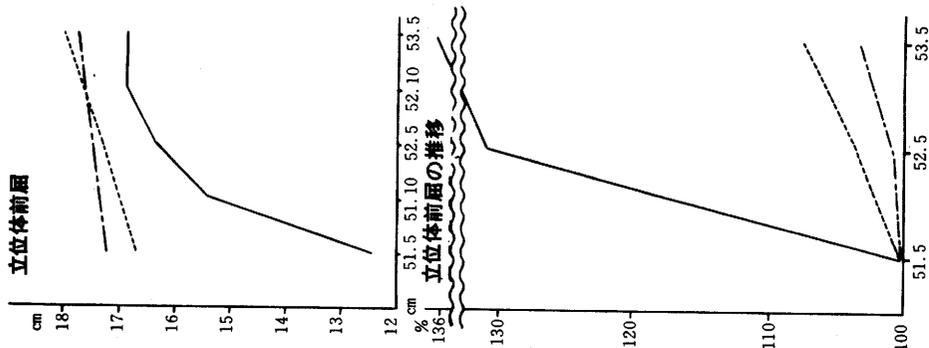
◎……県、全国よりすぐれているもの。

昭和51年度 入学生徒の体力の変容とその推移(男子)

—— 本校
 - - - 全国
 - - - 県

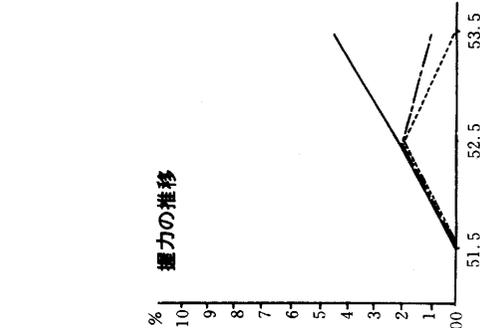
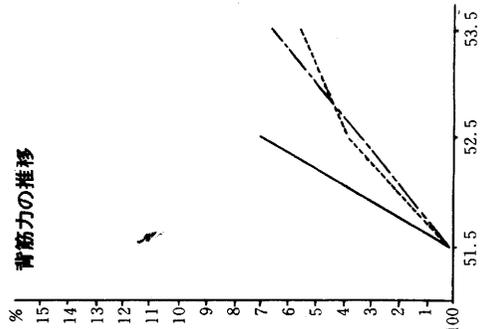
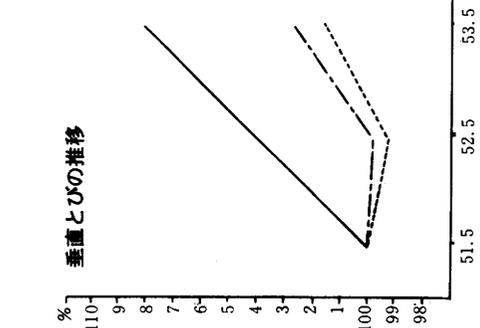
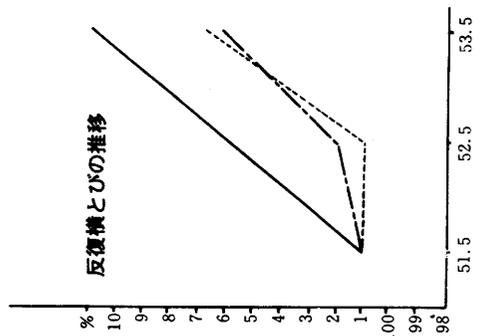
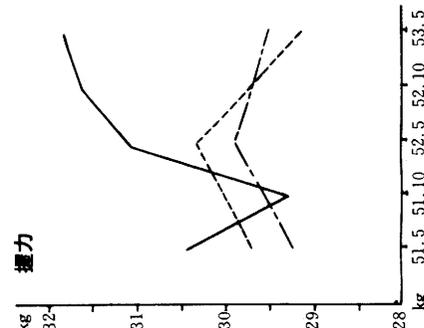
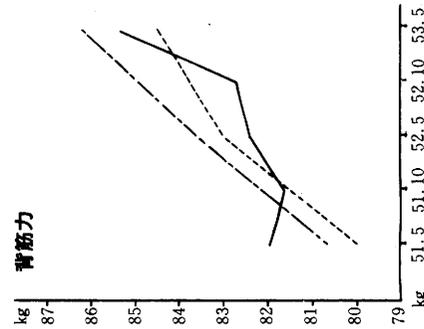
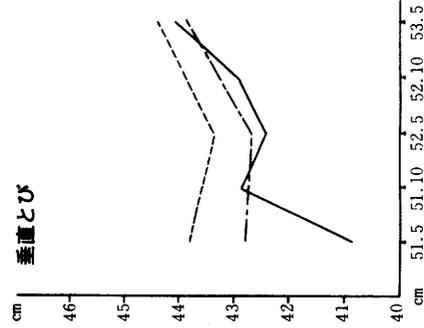
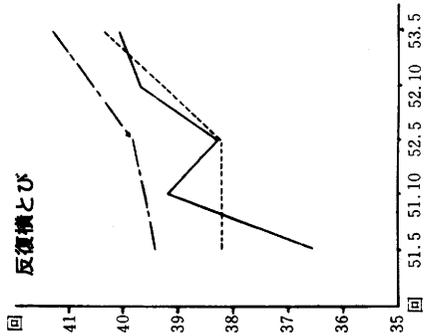


本校
全国
県

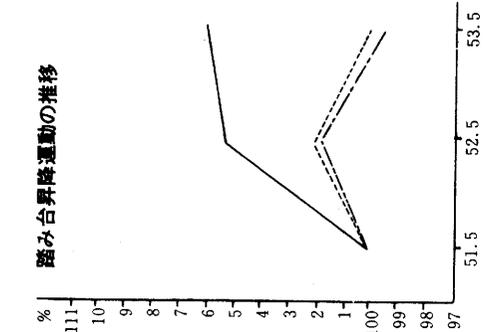
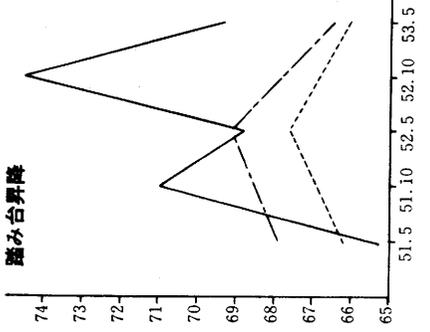
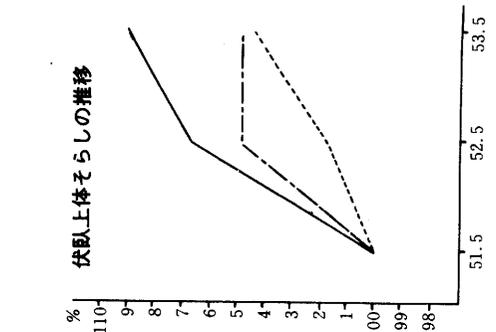
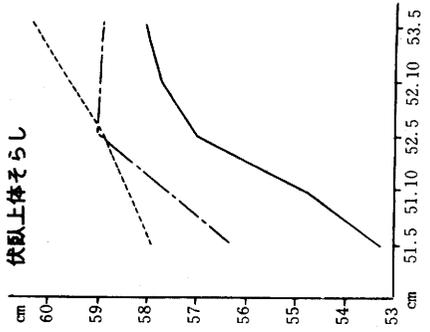
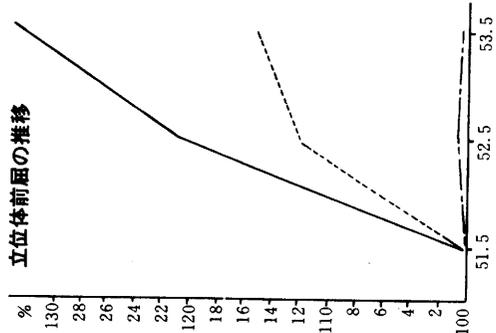
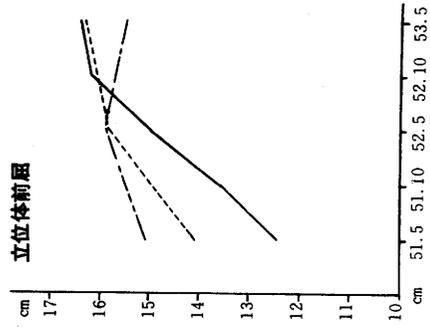


昭和51年度 入学生徒の体力の変容とその推移(女子)

—— 本校
 - - - 全国
 - - - 県



本校
全国
県



九州地区学校体育研究連絡協議会の

組織及び運営について

福岡県保健体育研究会

研究委員長 井上博満

この度、(財)日本学校体育研究連合会より機関誌記載のため九州区研究会の組織、運営並びに現状等について、福岡県の和田喜久蔵会長に原稿依頼がありましたので昭和37年発足の九州地区学校体育連絡協議会の歩みを振り返ってみることにします。

1. 昭和54年度の事業

(1) 研究発表大会

第18回鹿児島大会が九州地区学校体育研究連絡協議会、九州各県教育委員会、鹿児島県、市教育委員会の主催のもとに、鹿児島県学校体育研究連合会が主管して、11月9日(金)・10日(土)の両日、鹿児島市で開催され、参加者も千数百名を数えました。

(2) 九州地区学校体育連絡協議会

① 本年度の運営

大会前日に各県代表者(各県教委、各県各校種代表)による連絡協議会がもたれ、前年度の決算並びに本年度の運営について確認しさらに、次年度の開催県より大会要項が提案されて、次のように決定しました。

② 昭和55年度事業案

・期日 昭和54年11月7日(金)・8日(土)

・会場 唐津市内

・日程 1日目 授業提案・発表・研究協議
2日目 開・閉会行事・記念講演

・研究主題

「主体的に創造し、自主的に実践する体育学習をめざして」

・その他

口答発表県・誌上发表県(部会別)の確認

2. 九州地区学校体育研究会の発足

第1回熊本大会(昭和37年度)が開催されるまでは、各県が独自でテーマを決め県教育委員会の主催のもとに研究会が実施されていました。しかし、隣接県相互の参加者が増加するに及んで九州各県教育委員会が協議を重ねた結果、九州大会を実施する運びとなりました。

その結果第1回大会を熊本で開催することが決定されました。当時は、まだ、規約もなく、ただ開催担当県の順序だけが決められていました。従って、組織・運営・研究主題についても担当県独自のものであり、その県の研究会に他県が参加す

るという状況でした。

<開催担当県の順序>

- (1) (2) (3) (4) (5) (6)
熊本→福岡→鹿児島→宮崎→佐賀→長崎
(7)
→大分

3. 九州地区学校体育研究連絡協議

第10回福岡大会(昭和46年度)において、
会則が定められ、さらに、大会運営の变革と授業
提案が行われるようになりました。

(1) 会 則

九州地区学校体育研究連絡協議会会則

(名 称)

第1条 本会は九州地区学校体育研究協議会と称
する。

(事務所)

第2条 本会の事務所を会長の定めるところにお
く。

(目 的)

第3条 本会は九州各県における学校体育研究会
相互の連絡を密にし、学校体育の振興に寄
与する。

(事 業)

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の
ことがらを行なう。

1. 九州各県の学校体育に関する情報の交
換
2. 九州地区学校体育研究発表大会に関す
ること
3. その他、本会の目的を達成するために

必要なこと

(組 織)

第5条 本会は九州各県の学校体育研究会をもつ
て組織する。

(役 員)

第6条 本会に次の役員をおく。

会 長	1 名	副会長	2 名
参 与	若干名	理 事	若干名
幹 事	若干名	監 事	若干名

(役員を選出)

第7条 会長は輪番制による当番県の体育研究会
長をもってこれにあてる。

2. 副会長は前年次および次年次の当番県の研究
会長をもってこれにあてる。

3. 参与は学識経験者から理事会の承認を得て会
長がこれを委嘱する。

4. 理事は各県体育研究会および各県教育委員会
から選出する。

5. 幹事は会長がこれを委嘱する。

6. 監事は理事会で選出する。

(役員の任期)

第8条 本会役員の内任期は1ケ年とする。ただし、
再任をさまたげない。

(役員の仕事)

第9条 会長は本会を代表し会務を総括する。

2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるとき
はこれを代行する。

3. 参与は本会の組織、運営に関する助言指導す
る。

4. 理事は本会の重要な会務を審議する。

5. 幹事は本会の事務を処理する。

6. 監事は本会の会計を監査する。

(会 議)

第10条 理事会は少なくとも年1回、会長がこれを召集する。

(経 費)

第11条 本会運営の経費は各県負担金をもってこれにあてる。

附 則

本会則は、46年8月20日から施行する。

(2) 授 業 提 案

過去の口答発表に加えて、授業案が部会別に実施されるようになり、内容の充実と深化が図られ、口答発表の半数が誌上発表に代わることになりました。

<提案学年及び単元>

○小学校

- 1年 山のぼり
- 2年 遊園地
- 3年 体操と器械運動
- 4年 体操と器械運動
- 5年 ポートボール
- 6年 サッカー

○中学校

- 1年(男) 体操
- 1年(女) ダンス
- 2男(男) サッカー

○高等学校

- 1年(男) 剣道
- 1年(女) バレーボール
- 2年(男) ラグビー

(3) 大 会 運 営

従来、県教育委員会が主催して来ましたが、

福岡大会より発表県の研究会組織が確立され、研究会が主管するようになりました。また、発表要項についても各県独自のものから連絡協議会に提案され審議決定するようになりました。

4. 九州地区

学校体育研究会のテーマ設定

○第11回宮崎大会(昭和47年度)

・研究主題 「効果的な体育の学習指導」

副題

(小) 「運動の特性を生かした学習指導はどうあったらよいか」

(中) 「自主性を高めるための効果的な体育の学習指導」

(高) 「運動の特性を生かした効果的な体育の学習指導」

5. 九州地区

学校体育研究協議会の充実

○第14回大分大会(昭和50年度)において

口答発表・誌上発表の内容を各県に深化・焦点化させるために研究主題を数年間同一主題で進むことが確認されました。

6. 研究主題の変遷

○第14回大分大会(昭和50年度)

・研究主題 「体育の生活化をめざした効果的な学習指導は、どのようにすすめたらよいか」

○第15回沖縄大会(昭和51年度)

・研究主題 「ひとりひとりを生かし、明る

く、たくましい児童生徒の育成
をめざす体育学習」

○第16回熊本大会(昭和52年度)

- ・研究主題 「すすんで実践する体育学習を
めざして」

以上、九州地区学校体育研究連絡協議会及び研
究会の組織・運営についてその概要を述べてきま
した。

最後に、第17回福岡大会(昭和53年度)に
おける大会要項並びに役員・予算について紹介す
ることにします。

○第17回九州地区学校体育研究発表大会実施
要項

(1) 趣 旨

近時、人々の間に健康増進や体力の向上
が強く叫ばれている。この時にあたって
「身体活動を通しての教育」である体育に
おいて、児童ひとりひとりが積極的に体育
学習にとり組み、それを基盤として、生涯
体育への発展を図ることは大切なことと考
える。

そこで「すすんで実践する体育学習をめ
ざして」の主題のもとに、小・中・高校そ
れぞれの分野で、これにともなう諸問題に
ついて研究協議し、指導者の資質の向上を
はかることを目的とするものである。

(2) 主 催

九州地区学校体育研究連絡協議会 九州
各県教育委員会 福岡県教育委員会 福岡
市教育委員会

(3) 主 管

福岡県学校保健体育研究会

(4) 期 日

昭和53年11月10日(金)・11日
(土)

(5) 会 場

全体会場

福岡県立勤労青少年文化センター

福岡市西区百道2丁目3-15

TEL(092)851-4511

部会別会場

小学校 福岡県立草ヶ江小学校

福岡市中央区草香江二丁目3-5

TEL(092)771-3815

中学校 福岡市立梅林中学校

福岡市西区梅林415

TEL(092)871-4100

高等学校 福岡市立福岡西陵高等学校

福岡市西区拾六町1211の内

TEL(092)881-8175

(6) 生 題

すすんで実践する体育学習をめざして。

副題

小学校 「個人や集団の課題を豊かな活動
を通して解決する体育学習をめざし
て」

中学校 「すすんで実践する体育学習をめ
ざして」

高等学校「体力を高める効果的な体育学習」

(7) 日 程

部会名		8:30	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	
第1日	小学校		受付	公開授業		昼食	研究発表	研究協議			
	中学校		受付	公開授業		昼食	研究発表	研究協議			
	高等学校	受付	公開授業			昼食	研究発表	研究協議			
第2日	全体会	9:00 9:30 10:00 11:00 12:00									
			受付	閉会式	特別講演	閉会式					
		福岡県立勤労青少年文化センター									

- (8) 特別講演
- 演題 「学校体育の使命と課題」
- 講師 筑波大学教授 松田 岩 男
- バレーボール(1, 2年男子)
 - ハンドボール(3年男子)
 - 陸上競技(2年男子)

(9) 部会別指導助言者

- 小学校 中島則夫(九州女子短期大学教授) ◦ 九州地区学校体育研究
授) 連絡協議会役員一覧
- 中学校 厨 義弘(福岡教育大学教授) (役職・県名・氏名・県役職・所属)
- 高等学校 梶山彦三郎(福岡大学教授)

(10) 部会別公開授業内容

- 小学校
 - 基本の運動とゲーム(1, 2, 3, 4年)
 - 器械運動と体操(5, 6年)
 - 表現運動(5, 6年)
- 中学校
 - 器械運動(3年女子)
 - サッカー(2年男子)
 - バスケットボール(3年男子)
- 高等学校

会 長	福 岡	福岡県学校保健体育研究会長
副会長	熊 本	熊本県学校体育研究会 長
"	鹿 児 島	鹿児島県学校体育研究会 長
参 与	福 岡	体 育 課 長
	佐 賀	体 育 保 健 課 長
	長 崎	"
	大 分	"
	熊 本	"
	宮 崎	保 健 体 育 課 長
	鹿 児 島	"
沖 縄	"	

理事福岡	県学校体育係長 県小学校体育研究協議会長 県中学校保健体育研究会長 県高等学校保健体育研究会長 県学校保健体育研究会理事長
佐賀	指導主事 保健体育研究会会長 " 副会長 " 理事長
長崎	指導主事 学校体育研究会会長 " 副会長 "
幹事福岡	
監事福岡	

○ 予算の概要

収入の部(3,250 千円)

参加料 2,370 2,500 円× 948 人
 補助金 550 県, 市より
 県保体研 300 小, 中, 高より
 その他 30

支出の部(3,250 千円)

事務局費 330 事務費, 旅費, 印刷,
 通信, 渉外
 研究費 560 講師謝金, 旅費, 印刷
 会場借上
 諸会議費 120 会場借上, 実行委, 役
 員会, 事務局部会
 大会運営費 2,240 紀要等印刷, 看板, 記
 章, 食糧費, 会場借上,
 分科会々場諸費



編 集 後 記



このたび、日本学校体育研究連合会の本年度事業の一つとして計画した機関誌「学校体育研究」を発行する運びに至りました。

この計画を進めるに当たっては、特に教育課程の改訂に伴う体育（保健体育）の役割や課題に着目し、岩手大学の高橋哲雄先生に体育教師のあり方についての指針をいただき、また、各方面から組織としての研究体制の確立や具体的実践研究の立場から貴重な紹介をいただきました。

全国学校体育研究大会第17回群馬大会及び第18回東京大会の概要についても紹介するよう計画いたしましたが、諸般の事情により割愛させていただきました。心からお詫び致します。

最後に、貴重な原稿をお寄せいただきました諸先生に、誌面をかりて厚く御礼申し上げます。

今後、一層充実した機関誌を作成するよう努めて参る所存ですので、企画・編集等についてご意

見をお寄せくださるようお願い致します。

全国の先生がたの一層のご活躍をお祈り致します。

昭和55年 3月

編集委員会

編集委員氏名

酒井 一九（杉並区立阿佐ヶ谷中校長）

重田 一（都立富士高 校長）

西田 猛（渋谷区立中幡小校長）

赤木 康二（足立区立第三中 教頭）

後藤 守生（都立板橋高 教諭）

関口賢一郎（三鷹市立第六中 教諭）

中沢 光雄（品川区立芳水小校長）

船田 茂男（練馬区立練馬東中 教諭）

宮崎 昇男（港区立高陵中 教諭）

Ⓔ入倉 富夫（都立清瀬東高 校長）

財団法人 日本学校体育研究連合会 編集委員会

発行日 昭和55年3月15日

発行者 大石 三四郎

発行所 (財) 日本学校体育研究連合会

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3番1号

オリンピック記念青少年総合センター内

電話 03 - 465 - 3954 (代)

印刷所 株式会社 三 誠 社

取締役社長 茂 呂 弥兵衛

東京都文京区本郷2-22-4

電話 812-0241・811-2062

昭和55年3月31日 発行

非売品



